

## 封印を継承する者たち（2）

——イエズス会士 De Semedo から 李之藻 へ

——大秦景教流行中国碑のカレンダー暗号

北海道倶知安高等学校 原田牧夫

まず大秦景教流行中国碑について、『桑原隲藏著 大秦景教流行中国碑に就いて 青空文庫 [http://www.aozora.gr.jp/図書カードNo. 4707](http://www.aozora.gr.jp/図書カードNo.4707)』（底本は「桑原隲藏全集 第一巻」岩波書店 1938（昭和 43）年 2 月 13 日初版発行。）から引用します。

（前略）ネストル教の教義や、その支那傳來の歴史を書き誌したものである。

碑は黒色の石灰石より成り、その高さは臺の龜趺を除いて、約九フイット、幅は平均三フイット四インチ、厚さ約十一インチといふ。碑面には三十二行、毎行六十二字、すべて約千九百字の漢字が刻されてある。漢字の外にエストランゲロ（Estrangelo）と呼ばれる、當時主として傳道の場合に使用された、古體のシリア文字が若干刻されてある。このシリア文字は、大體に於て景教に關係ある僧侶約七十人の名を記したもので、その大部分には之に相當する漢名を添へてある。

碑に刻された漢文の解釋は、可なり六ヶ敷い。今から二十餘年前に、上海在住のジェスイット派の宣教師のアヴレ（Havret）が公にした碑文の解釋は、尤も傑出して居るが（7）[#「(7)」は注釈番号]、それは未完成でもあり、又不十分の點がないでもない。併し大體から見渡して、この碑文の内容は、次の如き四段の順序になつて居る。

（第一） 天地創成のこと、原人が罪の人となる次第、及びキリストの降誕を述べたもの。

（第二） 唐の太宗の時、阿羅本が景教の經像を齎らして長安に來朝したこと、太宗は之を容れ、長安の義寧坊に大秦寺を建てて、僧二十一人を度せしこと、次の高宗は天下の諸地方に景教の寺院を増置したこと、則天武后時代から睿宗時代にかけて、景教の法運やや不振に陥つたこと、玄宗時代に景教は再び唐室の保護を受けて、法運振興したこと、次の肅宗・代宗・徳宗三代を通じて、法運の益※[#二の字点、1-2-22] 隆昌したことを記したもの。

（第三） この記念碑建設の費用を喜捨した、伊斯の徳行を叙したもの。

（第四） 韻文で上來三段の記事と、略同様のことを頌したもの。

（後略）

次に掲げるのは大秦景教流行中國碑の漢文の箇所です。

[http://chingchueh.homedns.org/classic/T54/2144\\_001.htm](http://chingchueh.homedns.org/classic/T54/2144_001.htm) から引用しています。

## 大秦景教流行中國碑頌(并序)

### 大秦寺僧景淨述

粵若。常然真寂。先先而無元。杳然靈虛。後後而妙有。總玄樞而造化。妙眾聖以元尊者。其唯 我三一妙身無元真主阿羅訶歟判。十字以定四方。鼓元風而生二氣。暗空易而天地開。日月運而晝夜作。匠成萬物然立初人。別賜良和令鎮化海。渾元之性虛而不盈。素蕩之心本無希嗜。泊乎娑殫施妄。鈿飾純精。間平大於此是之中。隙冥同於彼非之內。是以三百六十五種。肩隨結轍。競織法羅。或指物以託宗。或空有以淪二。或禱祀以邀福。或伐善以矯人。智慮營營。恩情役役。茫然無得。煎迫轉燒。積昧亡途久迷休復。於是 我三一分身景尊彌施訶。戢隱真威。同人出代。神天宣慶。室女誕聖。於大秦景宿告祥。波斯曙耀以來貢。圓二十四聖有說之舊法。理家國於大猷。設 三一淨風無言之新教。陶良用於正信。制八境之度。鍊塵成真。啓三常之門。開生滅死。懸景日以破暗府。魔妄於是乎悉摧。棹慈航以登明宮。含靈於是乎既濟。能事斯畢。亭午昇真。經留二十七部。張元化以發靈關。法浴水風。滌浮華而潔虛白。印持十字。融四照以合無拘。擊木震仁惠之音。東禮趣生榮之路。存鬚所以有外行。削頂所以無內情。不畜臧獲。均貴賤於人。不聚貨財示罄遺於我。齋以伏識而成。戒以靜慎為固。七時禮讚。大庇存亡。七日一薦。洗心反素。真常之道。妙而難名。功用昭彰。強稱景教。惟道非聖不弘。聖非道不大。道聖符契。天下文明 太宗文皇帝。光華啓運。明聖臨人。大秦國有上德。曰阿羅本。占青雲而載真經。望風律以馳艱險。貞觀九祀至於長安 帝使宰臣房公玄齡總仗西郊賓迎入內。翻經書殿。問道禁闈。深知正真。特令傳授。貞觀十有二年秋七月。詔曰道無常名。聖無常體。隨方設教。密濟群生。大秦國大德阿羅本。遠將經像來獻上京。詳其教旨。玄妙無為。觀其元宗。生成立要。詞無繁說。理有忘筌。濟物利人。宜行天下。所司即於京義寧坊造大秦寺。一所度僧二十一人。宗周德①。青駕西昇。巨唐道光。景風東扇。旋令有司將 帝寫真轉摸寺壁。天姿汎彩。英朗景門。聖跡騰祥。永輝法界。案西域圖記及漢魏史策。大秦國南統珊瑚之海。北極眾寶之山。西望仙境花林。東接長風弱水。其土出火②布。返魂香。明月珠。夜光璧。俗無寇盜。人有樂康。法非景不行。主非德不立。土宇廣③。文物昌明。 高宗大帝。克恭續祖。潤色真宗。而於諸州各置景寺。仍崇阿羅本為鎮國大法主。法流十道。國富元休。寺滿百城。家殷景福。聖曆年。釋子用壯。騰口於東周。先天末。下士大笑。訕謗於西鎬。

有若僧首羅含。大德及烈。並金方貴緒。物外高僧。共振玄網。俱維絕紐。玄宗至道皇帝。令寧國等五王親臨福宇建立壇場。法棟暫橈而更崇。道石時傾而復正。天寶初。令大將軍高力士送五聖寫真寺內安置。賜絹百匹。奉慶睿圖。龍髯雖遠。弓劍可攀。日角舒光。天顏咫尺。三載大秦國有僧估和。瞻星向化。望日朝尊。詔僧羅含僧普論等一七人。與大德估和。於興慶宮修功德。於是天題寺榜。額戴龍書。寶裝璀璨。灼爍丹霞。睿扎宏空。騰凌激日。寵賚比南山峻極。沛澤與東海齊深。道無不可。所可名。聖無不作。所作可述。肅宗文明皇帝。於靈武等五郡。重立景寺。元善資而福祚開。大慶臨而皇業建。代宗文武皇帝。恢張聖運。從事無為。每於降誕之辰。錫天香以告成功。頒御饌以光景眾。且乾以美利故能廣生。聖以體元故能亨毒。我建中聖神文武皇帝。披八政以黜陟幽明。闡九疇以惟新景命。化通玄理。祝無愧心。至於方大而虛。專靜而恕。廣慈救眾苦。善貸被群生者。我修行之大猷。汲引之階漸也。若使風雨時。天下靜。人能理。物能清。存能昌。歿能樂。念生響應。情發目誠者。我景力能事之功用也。大施主金紫光祿大夫。同朔方節度副使。試殿中監。賜紫袈裟僧伊斯。和而好惠。聞道勤行。遠自王舍之城。聿來中夏。術高三代。藝博十全。始效節於丹庭。乃策名於王帳。中書令汾陽郡王郭子儀。初總戎於朔方也。肅宗俾之從邁。雖見親於臥內。不自異於行間。為公爪牙。作軍耳目。能散祿賜。不積於家。獻臨恩之頗藜。布辭憩之金闕。或仍其舊寺。或重廣法堂。崇飾廊宇。如翬斯飛。更效景門。依仁施利。每歲集四寺僧徒。虔事精供。備諸五旬。餒者來而飯之。寒者來而衣之。病者療而起之。死者葬而安之。清節達娑。未聞斯美。白衣景士。今見其人。願刻洪碑。以揚休烈。詞曰。真主無元。湛寂常然。權輿匠化。起地立天。分身出代。救度無邊。日昇暗滅。咸證真玄。赫赫文皇。道冠前王。乘時撥亂。乾廓坤張。明明景教。言歸我唐。翻經建寺。存歿舟航。百福偕作。萬邦之康。高宗纂祖。更築精宇。和宮敞朗。遍滿中土。真道宣明。式封法主。人有樂康。物無災苦。玄宗啓聖。克修真正。御榜揚輝。天書蔚映。皇圖璀璨。率土高敬。庶績咸熙。人賴其慶。肅宗來復。天威引駕。聖日舒晶。祥風掃夜。祚歸皇室。祆氛永謝。止沸定塵。造我區夏。代宗孝義。德合天地。開貸生成。物資美利。香以報功。仁以作施。暘谷來威。月窟畢萃。建中統極。聿修明德。武肅四溟。文清萬域。燭臨人隱。鏡觀物色。六合昭蘇。百蠻取則。道惟廣兮。應惟密強。名言兮演三一。主能作兮臣能述。建豐碑兮頌元吉。

大唐建中二年歲在作噩太族月七日大耀森文曰建立 時法主僧寧恕知東方之景眾也

朝議郎前行台州司士參軍呂秀巖書

助檢校試太常卿賜紫袈裟寺主僧業利

檢按建立碑僧行通

僧靈寶 僧内澄 僧光正  
僧和明 僧立本 僧法源  
僧審慎 僧寶靈 僧玄覽  
僧景通 老宿耶俱摩 僧明一  
僧保國 僧志堅 僧義濟  
僧玄德 僧利用 僧元□  
僧奉真 僧至德 僧和光  
僧景福 僧太和 僧崇德  
僧德建 僧去甚 僧廣德  
僧福壽 僧□□ 僧寶達  
僧□明 僧和吉 僧□□  
僧遙□ 僧日進 □□輪  
僧④和 僧崇敬 僧惠通  
僧□□ □居信 僧文貞  
僧文明 僧昭德 僧曜原  
僧仁□ 僧玄真 僧明泰  
僧利□ 僧敬德 僧元□  
僧乾□ 僧守一 僧光□  
僧聞順 僧普濟 僧凝□  
僧冲和 僧英德 僧靈德  
僧靈壽 僧還淳 □敬真

後一千七十九年咸豐己未武林韓泰華來觀幸字畫完整重造碑亭覆焉惜故友吳子苾方伯不及同遊也為悵然久之

引用元の漢字のうちMS明朝フォントに無い漢字は適宜置き換えています。また①③④の箇所は引用元では、①[一/(口\*口)/亡]③[潤-日+舌]④[這-言+(衣-一)]とされ、②は[糸+完]という漢字です。また、当地を訪れた日本人の方のホームページで紹介されている石碑の写真を見る限り、これらの文字の羅列には句読点に該当するらしきものは見当たりません。先に引用した『大秦景教流行中國碑に就いて』には「碑面には三十二行、每行六十二字」とありますが、写真を見る限りにおいては、随所に隙間があるようで、どうやら完全な三十二行六十二字にはなっていないようです。

表面的な漢文の解釈はさておき、この碑文が李之藻の手による暗号を含むならば、同じく彼の手によった「責子」の解読方法が参考になるはず。「責子」の暗号の端緒は数の規則性にありました。大秦景教流行中國碑の碑文の冒頭にも数が現れています。

粵若。常然真寂。先先而無元。窅然靈虛。後後而妙有。總玄樞而造化。妙眾聖以元尊者。其唯 我三一妙身無元真主阿羅訶歟判。十字以定四方。鼓元風而生二氣。暗空易而天地開。日月運而晝夜作。匠成萬物然立初人。別賜良和令鎮化海。渾元之性虛而不盈。素蕩之心本無希嗜。泊乎娑殫施妄。鈿飾純精。間平大於此是之中。隙冥同於彼非之內。是以三百六十五種。肩隨結轍。競織法羅。或指物以託宗。或空有以淪二。或禱祀以邀福。或伐善以矯人。智慮營營。恩情役役。茫然無得。煎迫轉燒。積昧亡途久迷休復。於是 我三一分身景尊彌施訶。戢隱真威。同人出代。神天宣慶。室女誕聖。於大秦景宿告祥。波斯曙耀以來貢。圓二十四聖有說之舊法。理家國於大猷。設 三一淨風無言之新教。陶良用於正信。制八境之度。鍊塵成真。啓三常之門。開生滅死。懸景日以破暗府。魔妄於是乎悉摧。棹慈航以登明宮。含靈於是乎既濟。能事斯畢。亭午昇

このうち、最も気になるのが「是以三百六十五種」という箇所「三百六十五」です。これは1年間の日数と一致します。また「責子」の解読に現れた数の位取り表記は、「我三一妙身」「我三一分身」「三一淨風」に現れる「三一」を、「三十一」と解釈することを促します。「三百六十五」が1年間の日数ならば、「三十一」は「大の月」の日数と一致し、どちらも暦に関わる数として意識されます。ただし暦とはいっても、唐代の暦のような太陰暦ではなく、太陽暦です。マテオ・リッチがグレゴリオ暦（これも無論、太陽暦です）を漢文に翻訳したこと、そして李之藻が西法の暦の採用を強く主張していたことを思い出しましょう。

これらのことを手掛かりにして「粵若。常然真寂」から「建豊碑兮頌元吉」までをカレンダーの配置にしてみましよう。本来無かった句読点はすべて取り除き、漢字1文字を1日分に充て、各月ごとに改行し、4年目のみは2月を29文字にすると次の通りです。今後はこれを「カレンダー配置」と呼ぶことにしましょう。

### カレンダー配置

粵若常然真寂先先而無元窅然靈虛後後而妙有總玄樞而造化妙眾聖以元尊者其唯我三一妙身無元真主阿羅訶歟判十字以定四方鼓元風而生二氣暗空易而天地開日月運而晝夜作匠成萬物然立初人別賜良和令鎮化海渾元之性虛而不盈素蕩之心本無希嗜泊乎娑殫施妄鈿飾純精間平大於此是之中隙冥同於彼非之內是以三百六十五種肩隨結轍競織法羅或

指物以託宗或空有以淪二或禱祀以邀福或伐善以矯人智慮營營恩情役  
役茫然無得煎迫轉燒積味亡途久迷休復於是我三一分身景尊彌施訶戢隱  
真威同人出代神天宣慶室女誕聖於大秦景宿告祥波斯曙耀以來貢圓二十  
四聖有說之舊法理家國於大猷設三一淨風無言之新教陶良用於正信制  
八境之度鍊塵成真啓三常之門開生滅死懸景日以破暗府魔妄於是乎悉摧  
棹慈航以登明宮含靈於是乎既濟能事斯畢亭午昇真經留二十七部張元  
化以發靈關法浴水風滌浮華而潔虛白印持十字融四照以合無拘擊木震仁  
惠之音東禮趣生榮之路存鬢所以有外行削頂所以無內情不畜臧獲均貴賤  
於人不聚貨財示罄遺於我齋以伏識而成戒以靜慎為固七時禮讚大  
庇存亡七日一薦洗心反素真常之道妙而難名功用昭彰強稱景教惟道非聖  
不弘聖非道不大道聖符契天下文明太宗文皇帝光華啓運明聖臨人大秦  
國有上德曰阿羅本占青雲而載真經望風律以馳艱險貞觀九祀至於長安帝  
使宰臣房公玄齡總仗西郊賓迎入內翻經書殿問道禁闈深知正真特令傳  
授貞觀十有二年秋七月詔曰道無常名聖無常體隨方設教密濟群生大秦國  
大德阿羅本遠將經像來獻上京詳其教旨玄妙無為觀其元宗生成立要詞無  
繁說理有忘筌濟物利人宜行天下所司即於京義寧坊造大秦寺一所度僧  
二十一人宗周德①青駕西昇巨唐道光景風東扇旋令有司將帝寫真轉摸寺  
壁天姿汎彩英朗景門聖跡騰祥永輝法界案西域圖記及漢魏史策大秦國  
南統珊瑚之海北極眾寶之山西望仙境花林東接長風弱水其土出火②布返  
魂香明月珠夜光璧俗無寇盜人有樂康法非景不行主非德不立土宇廣③文  
物昌明高宗大帝克恭纘祖潤色真宗而於諸州各置景寺仍崇阿羅本  
為鎮國大法主法流十道國富元休寺滿百城家殷景福聖曆年釋子用壯騰口  
於東周先天末下士大笑訕謗於西鎬有若僧首羅含大德及烈並金方貴緒  
物外高僧共振玄網俱維絕紐玄宗至道皇帝令寧國等五王親臨福宇建立壇  
場法棟暫橈而更崇道石時傾而復正天寶初令大將軍高力士送五聖寫真  
寺內安置賜絹百匹奉慶睿圖龍髯雖遠弓劍可攀日角舒光天顏咫尺三載大  
秦國有僧佶和瞻星向化望日朝尊詔僧羅含僧普論等一七人與大德佶和於  
興慶宮修功德於是天題寺榜額戴龍書寶裝璀璨丹霞睿扎宏空騰凌  
激日寵賚比南山峻極沛澤與東海齊深道無不可所可名聖無不作所作可  
述肅宗文明皇帝於靈武等五郡重立景寺元善資而福祚開大慶臨而皇業  
建代宗文武皇帝恢張聖運從事無為每於降誕之辰錫天香以告成功頒御饌  
以光景眾且乾以美利故能廣生聖以體元故能亨毒我建中聖神文武皇帝披  
八政以黜陟幽明闡九疇以惟新景命化通玄理祝無愧心至於方大而虛  
專靜而怨廣慈救眾苦善貸被群生者我修行之大猷汲引之階漸也若使風雨

時天下靜人能理物能清存能昌歿能樂念生響應情發目誠者我景力能事  
之功用也大施主金紫光祿大夫同朔方節度副使試殿中監賜紫袈裟僧伊斯  
和而好惠聞道勤行遠自王舍之城聿來中夏術高三代藝博十全始效節於  
丹庭乃策名於王帳中書令汾陽郡王郭公子儀初總戎於朔方也肅宗俾之從  
邁雖見親於臥內不自異於行間為公爪牙作軍耳目能散祿賜不積於家獻臨  
恩之頗黎布辭憩之金闕或仍其舊寺或重廣法堂崇飾廊宇如翬斯飛更效  
景門依仁施利每歲集四寺僧徒虔事精供備諸五旬餽者來而飯之寒者來而  
衣之病者療而起之死者葬而安之清節達娑未聞斯美白衣景士今見其人  
願刻洪碑以揚休烈詞曰真主無元湛寂常然權輿匠化起地立天分身出代救  
度無邊日昇暗滅成證真玄赫赫文皇道冠前王乘時撥亂乾廓坤張明明景教  
言歸我唐翻經建寺存歿舟航百福偕作萬邦之康高宗纂祖更築精宇  
和宮敞朗遍滿中土真道宣明式封法主人有樂康物無災苦玄宗啓聖克修真  
正御榜揚輝天書蔚映皇圖璀璨率土高敬庶績咸熙人賴其慶肅宗來復天  
威引駕聖日舒晶祥風掃夜祚歸皇室祚氛永謝止沸定塵造我區夏代宗孝義  
德合天地開貸生成物資美利香以報功仁以作施場谷來威月窟畢萃建中  
統極聿修明德武肅四溟文清萬域燭臨人隱鏡觀物色六合昭蘇百蠻取則道  
惟廣兮應惟密強名言兮演三一主能作兮臣能述建豐碑兮頌元吉

最後の「吉」の字は5年目の8月27日に該当します。これと符合するように1年目の11月の下旬に「二十七」があり、その「二十七」の「七」自体が、27日です。また、その前月の冒頭には「八」があります。「二十七」については、本文に続く「大唐建中二年歲在作噩太蔟月七日大耀森文曰建立」にも「二」と「七」が現れているのです。なお、元々の碑文は当然縦書きですが、西洋風カレンダー配置ということなので横書きにして考えています（実はこのレポートが横書きなのは、この理由によるのです）。

このカレンダー配置において、「三一」に注目しましょう。つまり大の月の31日の文字に注目するのです。

## 大の月の解読（1）

31日の箇所を上から追うと、「元鎮或隱十摧仁賤聖帝國無寺返文口壇大於可饌披雨斯從臨而救教真義道」を得ます。最初の1年間に当るのは「元鎮或隱十摧仁」です。数字に特別に留意した当初の姿勢を保てば、「元鎮或隱十摧仁」の「十」がとりわけ重視されるべき文字であることになります。この「十」を十字架、つまり「キリスト教」を表す文字として解釈しましょう。すると

「元鎮或隱十摧仁」

= 「元」は十（キリスト教）を圧迫し、または隠し、仁（博愛の志）をくじいた」

です。この「元」は「元朝」ではあり得ません。『新村出編 広辞苑 第四版 1991 岩波書店』の「景教」の項は次の通りです。

（「光り輝く教え」の意）東ローマ帝国のネストリウスの開いたキリスト教の一派の中国での呼称。唐代、中国に伝わり、唐朝が保護したために隆盛、唐末に至ってほとんど滅亡。後また、蒙古民族の興隆と共に興ったが、元（げん）と共に衰滅。

つまり元朝では、景教は圧迫されるどころか流行しているのです。「元」が「元朝」ではないとすると、「元」＝「もとのもの」です。次の「賤聖帝國無寺」ですが、「賤聖」である帝國というのはどういう意味でしょう。「元鎮或隱十摧仁、賤聖帝國無寺」としてセットで考えればこの謎は解けます。つまり「元」＝「もとのもの」はキリスト教の発祥国であるローマ帝国の、キリスト教発生当時の状況を指しているのです。ローマ帝国の後の東ローマ帝国で431年に行われたエフェソスの公会議において、ネストリウス派は異端と決め付けられ、ヨーロッパから締め出されてしまいます。つまり「元」はローマ帝国を指し、「賤聖帝國」は東ローマ帝国を指しているのです。東ローマ帝国は、前身のローマ帝国においてキリスト教が誕生している帝国なのですから「聖帝國」なのですが、ネストリウス派から見れば、前身のローマ帝国においてもキリスト教の発生当初は徹底的に弾圧され、東ローマ帝国においても異端とされてしまうわけです。異端なのですから、当然「無寺」になります。そのような帝国なのですから、単なる「聖帝國」ではなく、卑しい聖帝國、つまり「賤聖帝國」なのです。つまりこの箇所の暗号は、景教徒になりきったような視点で記されているのです。

**元鎮或隱十摧仁**

**賤聖帝國無寺**

**発生当初は十（キリスト教）を圧迫し、または隠し、仁（博愛の志）をくじいた。**

**卑しい「聖帝國」には寺など無い。**

これは宣教師テレンツ鄧玉函の名前の反切の解読結果である



## 讒胡欲虞互唐

胡をそしり、虞を欲し唐をわたる。

＝（ネストリウス派を受け入れなかった）西洋の国をそしり、  
理想の時代を望んで、唐のすみずみまで行った。

と符合します。続く箇所は「返文口壇大於可饌披雨斯從臨而救教真義道」。このままでは意味不通です。「返文」を下から上に逆に追うことと解し、「返文口」の3文字を下から上に逆に追う箇所の入り口と見なすと、「返文口」に続く3文字は、「壇大於」→「於大壇」＝「大きな壇から」となります。この追い方を「返文口」も含めて捉えると、「返文口壇大於」は「→→→←←←」という追い方になっています。続く箇所もこのパターンで把握可能です。つまり「可饌披雨」→「可饌雨披」、「斯從臨而救教真義道」→「而臨從斯救教真義道」です。ただし「可饌雨披」のままでは意味不通です。「可饌雨披」には少々トリックが隠れています。「饌」の食ヘンを「食べる」つまり除去して「巽」とした上で、「披」の手ヘンを奪って「撰」とするトリックです（このトリックは後にも現れて符合を得ます）。つまり

「饌」「披」→「食+巽」「手+皮」→「手+巽」「皮」→「撰」「皮」

によって

「可饌披雨」→「可饌雨披」→「可撰雨皮」

とします。「雨皮」は雨のための覆いのことです。「壇」は「だん。土を盛り上げて築いたもの。」です。つまり

## 於大壇可撰雨皮

土を盛り上げてつくった大きな壇から雨よけをそなえなさい

です。残りは簡単です。

## 而臨從斯

## 救教真義道

そしてこれを見てこの教えに従いなさい。救いの教え、本当の正しい道。

以上を続けると次の通りです。

元鎮或隱十摧仁  
賤聖帝國無寺  
於大壇可撰兩皮  
而臨從斯  
救教真義道

前身のローマ帝国は、十（キリスト教）を発生当初には圧迫し、または隠し、仁（博愛の志）をくじいた。

（そのような由来をもつような）卑しい「聖帝國」には寺など無い。  
土を盛り上げてつくった大きな壇から雨よけをそなえなさい。  
そしてこれを見てこの教えに従いなさい。救いの教え、本当の正しい道。

ここで以前引用した『桑原隲藏著 大秦景教流行中國碑に就いて』から「セメド (Semedo) といふ宣教師の作った『支那通史』の箇所を引用します。傍線は原田です。

この注意すべき古碑が出土すると、職工達は直にその由を官衙に上申した。知府が現場に出馬して、古碑を検閲した後ち、之を見事な土臺の上に安置し、風雨の迫害を保護し、同時に諸人の觀覽を自由にすべく、碑の上に碑亭を構へた。珍奇な古碑の出土の評判が四方に擴まると、その古碑を見物すべく、澤山の人々が雲集した。丁度この頃は、キリスト教が可なり支那人の間に知られて居つたから、{キリスト教に関する若干の知識を有する} さる紳士は、この古碑を見て、キリスト教に關係あるものと推測して、{浙江省の} 杭州府に在住する彼の友人で、教名を **Leo** {n} といふ、キリスト教信者の官吏の手許へ、その碑拓一枚を送り届けた。この碑拓は、當時杭州府在住の宣教師達に、想像以上の大なる歡喜を齎らした。

傍線の箇所と、先程の「土を盛り上げてつくった大きな壇から雨よけをそなえなさい。そしてこれを見てこの教えに従いなさい。救いの教え、本当の正しい道。」は奇妙にも符合しています。実は符合はそれだけではありません。再び『桑原隲藏著 大秦景教流行中國碑に就いて』から、前掲『支那通史』に関する解説箇所を引用します。

尚ほ又明の李之藻の「讀景教碑書後」といふ一篇がある。こは『唐景教碑頌正詮』の中にも、『方外焚書』などの中にも載せられて居る。この李之藻は、かの有名なる徐光啓と相並んで、當時の耶蘇信徒中の大立者であつた。彼の教名を **Leon** といひ、當時の洋人の記録には、**Leon Li** として知られて居る。上に紹介したセメドの記事に、杭州

府在住の官吏で教名 **Leo** {n} とあるのは、即ちこの李之藻である。

つまり李之藻は宣教師たちに、**Leon** として知られていたわけであって、**Leo** とされていたわけではないのです。ところが **De Semedo** の著した『支那通史』の前掲箇所では、李之藻は **Leo** とされていたわけであり、桑原氏はわざわざ {n} を補って訂正しているのです。ですが我々が「責子」で得た李之藻の教名は、この『支那通史』と同じ **Leo Li** だったわけです。こうして **Alvarus de Semedo** に対する景教碑偽造加担の疑いが生じてくるのです。この疑いについては、後に再び議論することになります。

## 小の月の末日の解読

では次に、小の月の末日の解読に取り掛かりましょう。カレンダー配置の小の月の末日を上から順に追います。ただし最後の8月は27日までなので、これも小の月に含めることにします。各月の末字を追うと、「而平役制元大秦傳僧國本緒真凌業虚事於效人宇天中吉」となります。これは次のように追うことができます。

而平役制元大秦傳僧國本緒真凌業虚事於效人宇天中吉

↓

而平役制元大 秦傳僧國本 緒真凌業虚 事於效人宇天中吉

←←←←← ←←←←← ←←←←← →→→→→→→→→

↓

↓ (而「そして」を「事於效人宇天中吉」に続ける指示と解す)

↓

虚業凌真緒 本國僧傳秦 大元制役平事於效人宇天中吉

### 虚業凌真緒

「緒」は「長く続いた物事のつながり。系統を引くもの。」です。つまり「真緒」とは石碑に記された景教の由来を指し、その表向きの銘文に対して、暗号で綴った影の文を「虚業」と呼んでいるのです。「虚業凌真緒」は「影の仕事は景教の由来を記した本文を凌ぐ。」です。

### 大元制役平事於效人宇天中吉

「大元制」については、上元、中元、下元という陰暦の三元日の呼び名と、目下の漢字の配列規則により「グレゴリオ暦」を指していると解します。平事は成句で和睦のこと。宇天という成句はありませんが、天宇は成句で天下、大空のことです。「宇天中吉」は「大きな天

の中のしあわせ」、つまり「天国の幸せ」です。「效」は「授ける」と解しましょう。すると「大元制役平事於效人宇天中吉」は「**大元制**は人に天国の幸せを授けるに際して、**和睦の助けとなる。**」となります。

この箇所はマテオ・リッチによる前出の一六〇五年五月九日付の北京からローマに宛てた書簡と見事に符合します。

#### **本國僧傳秦**

本國僧は、中国の僧侶。ただしこれに続く箇所が「大元制」が人に天国のしあわせを授けるに際して、和睦の助けとなる。」とローマに連絡する僧侶なのだから、中国に居る宣教師と解するのが自然。「**本國僧傳秦**」は「**中国に居る宣教師はローマに伝える**」となります。

以上を繋げると次の通りです。

### **虚業凌真緒**

#### **本國僧傳秦**

#### **大元制役平事於效人宇天中吉**

**影の仕事は景教の由来を記した本文を凌ぐ。**

#### **中国に居る宣教師はローマに伝える**

**「グレゴリオ暦は人に天国の幸せを授けるに際して、和睦の助けとなる。」と。**

ところで「於效人宇天中吉」における「效人」というのは解りにくい箇所です。「效人」というよりは「教人」とすべきところです。実は「效」の集韻反切は後教切、吉了切、下巧切の3つで、「人」は而隣切です。「後教」つまり「後の「教」というのは、一通り解読した後「效」を「教」とすべきだとする目下の議論と符合し、「吉了」と「而隣」は、「事於效人宇天中吉」の箇所が、「而」の指示を含む句から続き、「吉」で終了することと符合します。そして「下巧」つまり「下の巧み」は、元々の碑文が縦書きであるため、この暗号の文字が、縦書きでの解読に際しては下端にくることと符合するのです。

## 大の月の解読（2）

今度は大の月だけ取り出して、末日が先に得ている「元鎮或隱十摧仁、賤聖帝國無寺。於大壇可撰雨皮、而臨從斯。救教真義道。」の順になるように月順を入れ替えた配置を考えましょう。「返文口」の月は削除し、さらに「元鎮或隱十摧仁、賤聖帝國無寺。於大壇可撰雨皮、而臨從斯。救教真義道。」の5つの句ごとに1行間隔を空けておきます。そして今後はこれを「大月改定配置」と呼ぶことにしましょう。

## 大月改定配置

粵若常然真寂先先而無元窅然靈虛後後而妙有總玄樞而造化妙眾聖以元  
生二氣暗空易而天地開日月運而晝夜作匠成萬物然立初人別賜良和令鎮  
大於此是之中隙冥同於彼非之內是以三百六十五種肩隨結轍競織法羅或  
役茫然無得煎迫轉燒積味亡途久迷休復於是我三一分身景尊彌施訶戢隱  
真威同人出代神天宣慶室女誕聖於大秦景宿告祥波斯曙耀以來貢圓二十  
八境之度鍊塵成真啓三常之門開生滅死懸景日以破暗府魔妄於是乎悉摧  
化以發靈關法浴水風滌浮華而潔虛白印持十字融四照以合無拘擊木震仁

惠之音東禮趣生榮之路存鬚所以有外行削頂所以無內情不畜臧獲均貴賤  
庇存亡七日一薦洗心反素真常之道妙而難名功用昭彰強稱景教惟道非聖  
國有上德曰阿羅本占青雲而載真經望風律以馳艱險貞觀九祀至於長安帝  
授貞觀十有二年秋七月詔曰道無常名聖無常體隨方設教密濟群生大秦國  
大德阿羅本遠將經像來獻上京詳其教旨玄妙無為觀其元宗生成立要詞無  
二十一人宗周德①青駕西昇巨唐道光景風東扇旋令有司將帝寫真轉摸寺

秦國有僧佶和瞻星向化望日朝尊詔僧羅含僧普論等一七人與大德佶和於  
寺內安置賜絹百匹奉慶睿圖龍髯雖遠弓劍可攀日角舒光天顏咫尺三載大  
物外高僧共振玄網俱維絕紐玄宗至道皇帝令寧國等五王親臨福宇建立壇  
激曰寵賚比南山峻極沛澤與東海齊深道無不可所可名聖無不作所作可  
建代宗文武皇帝恢張聖運從事無為每於降誕之辰錫天香以告成功頒御饌→撰  
專靜而怨廣慈救眾苦善貸被群生者我修行之大猷汲引之階漸也若使風雨  
以光景眾且乾以美利故能廣生聖以體元故能亨毒我建中聖神文武皇帝披→皮

景門依仁施利每歲集四寺僧徒虔事精供備諸五旬餽者來而飯之寒者來而  
邁雖見親於臥內不自異於行間為公爪牙作軍耳目能散祿賜不積於家獻臨  
丹庭乃策名於王帳中書令汾陽郡王郭子儀初總戎於朔方也肅宗俾之從  
之功用也大施主金紫光祿大夫同朔方節度副使試殿中監賜紫袈裟僧伊斯

願刻洪碑以揚休烈詞曰真主無元湛寂常然權輿匠化起地立天分身出代救  
度無邊日昇暗滅咸證真玄赫赫文皇道冠前王乘時撥亂乾廓坤張明明景教  
和宮敞朗遍滿中土真道宣明式封法主人有樂康物無災苦玄宗啓聖克修真  
威引駕聖日舒晶祥風掃夜祚歸皇室祆氛永謝止沸定塵造我區夏代宗孝義  
統極聿修明德武肅四溟文清萬域燭臨人隱鏡觀物色六合昭蘇百蠻取則道

今度は30日の縦列を上から追うと「以令羅戢二悉震 貴非安秦詞摸 和載立作御風帝 來獻之伊 代景修孝則」を得ます。

**以令羅戢二悉震**

「以」は「～によって」、「令」は「おきて」、「羅」は「つらねる」、「戢」は「あつめてしま  
いこむ」、「悉」は「ことごとく」、「震」は「おどろく。おそれる。おののく。」ですので、  
「以令羅戢二悉震」は「命令によって二列に（文字を）連ね、二列に（文字を）集めて  
（暗号として）封じた。ことごとくおどろく（だろろうよ）。」です。「悉震」は、「責子」の  
「将慄」や「有肌」にそっくりです。

**貴非安秦詞摸**

これは並べ替えによって、

貴非安秦詞摸

↓

┌───┐  
貴非↓安秦詞摸

←←→→→→

↓

摸安秦詞、非貴。

とします。この並べ替えは次にも現れることで符合を得ます。

安秦→胡人の秦→大秦=ローマ帝国

と解せます。「安」は「安息」つまりアルケサス朝パルティアの略であることから、唐代の  
胡人の漢名にはよく「安」が使われました。胡人の語義をペルシャの人に限らず一般の異民  
族にまで敷衍させていると考えれば、「安秦→胡人の秦→大秦=ローマ帝国」と解せます。  
つまり「摸安秦詞、非貴。」は「ローマの言葉を真似たものだ、貴重な物ではないのだ。」と  
いう意味です。「ローマの言葉を真似」ていて「非貴」だ、というのは、つまり碑文に漢文  
で記されたキリスト教に関する知識が、明末のイエズス会宣教師がもたらした知識をなぞっ

ただけの代物だ、ということでしょう。

和載立作御風帝 來獻之伊

「貴非安秦詞摸」とまったく同じ並べ替えを施すことで、意味がほとんど通るようになります。つまり

和載立作御風帝 來獻之伊

↓

和載立作御風帝    ↓來獻之伊

←←    →→→→

↓

和載立作御帝風 伊來獻之

とします。「和」は「声や調子を合わせる」、「載」は「紙に記す」ですので、「和載立」は、「文字を記し建立することに協力する」ことです。文字を記し、石碑を完成させてから、まずは土中に埋めるわけですが、それを「発掘」させて、結局は立てさせるわけですので、早い話が「文字を記し建立する」です。「伊」は「かれ・かの・これ・この」ですから、「伊來獻之」は「彼が来てこれを献じた」です。

「作御帝風」というのは「皇帝の風格に作った」ということでしょうか。しかし御は「皇帝の動作や所有物につけて、尊敬をあらわすことば。」です。つまり御は皇帝の動作や所有物につくものであって、皇帝自体につくものではないのです。景教流行碑は「皇帝の風格」というよりも、いかにも唐代の石碑の風に作られています。つまりこの「作御帝風」は「作御国風」のはずなのです。この場合「御国風」の「国」とは、既に滅びた唐を意味することになります。この箇所については、もとのカレンダー配置では次の通りです。

激日寵賚比南山峻極沛澤與東海齊深道無不可所可可名聖無不作所作可  
 述肅宗文明皇帝於靈武等五郡重立景寺元善資而福祚開大慶臨而皇業  
 建代宗文武皇帝恢張聖運從事無為每於降誕之辰錫天香以告成功頒御饌  
 以光景眾且乾以美利故能廣生聖以體元故能亨毒我建中聖神文武皇帝披  
 八政以黜陟幽明闡九疇以惟新景命化通玄理祝無愧心至於方大而虛  
 專靜而怨廣慈救眾苦善貸被群生者我修行之大猷汲引之階漸也若使風雨  
 時天下靜人能理物能清存能昌歿能樂念生響應情發目誠者我景力能事

カレンダー配置において、今議論している「作御帝風」の左隣りを下から追うと、「能使虚皇頒皇所」→「頒皇所能使虚皇」→「皇所を賜り、虚を皇に使うことができる」です。これを「帝」→「虚」という指示と解して

「作御帝風」→「作御虚風」＝「(皇帝の国の) 廢墟の趣に作る」

となります。こうして得られる「作御虚風」は、景教流行碑を表す言葉として、先に述べた「作御国風」よりも適確です。以上により次のように解説されます。

和載立作御風帝 來獻之伊

↓

和載立作御風帝 ↓ 來獻之伊

←← →→→→

↓

和載立作御帝風 伊來獻之

↓

**和載立**

**作御虚風**

**伊來獻之**

**文字を記し建立することに協力し、  
(皇帝の国の)廢墟の趣に作った。**

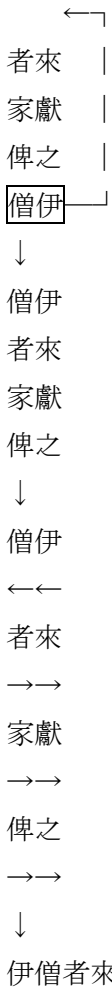
**彼が来てこれを献じた。**

この最後の「彼が来てこれを献じた。」の「彼」とは一体誰のことでしょう。この句の意味の不完全さはどのように解決されるのでしょうか。「作御帝風」の文法上の不完全さは、左隣の列の補助によって解決されました。「伊來獻之」の意味上の不完全さについても、同様に左隣の列の補助によって解決されます。ただし今度はカレンダー配置ではなく大月改定配置で十分に間に合います。

景門依仁施利每歳集四寺僧徒虔事精供備諸五旬餒者來而飯之寒者來而  
邁雖見親於臥内不自異於行間為公爪牙作軍耳目能散祿賜不積於家獻臨  
丹庭乃策名於王帳中書令汾陽郡王郭公子儀初總戎於朔方也肅宗俾之從  
之功用也大施主金紫光祿大夫同朔方節度副使試殿中監賜紫袈裟僧伊斯



上に掲げた2文字枠の単位で「伊來獻之」と同じ順に追います。ただし入れ替えを施した「伊僧」のみ、逆向きに追うことになります。



「伊僧者來家獻、俾之。」は「かの僧侶が家に来て献じ、これに従った」です。「俾」というのは単に「従う」行為ではありません。「卑」を含むことから察しがつく通り、「俾」は「身をかがめて従う」、つまり「(身分の低い者がそうするように) 低姿勢で従う」ことです。

以上に見たように、「伊僧者來家獻、俾之。」は確かに「伊來獻之」の意味上の不完全さを補っています。ここまでをまとめてみると次の通りです。

以令羅戢二悉震

摸安秦詞非貴

和載立作御虛風

伊來獻之（伊僧者來家獻俾之）

命令によって二列に（文字を）連ね、

二列に（文字を）集めて（暗号として）封じたのだ。ことごとく驚く（だろうよ）。

ローマの言葉を真似たもので、貴重な物ではないのだ。

文字を記し建立することに協力し、皇帝の国の廃墟の趣に作った。

彼が来てこれを献じた（あの僧侶が家に来て献じ、これに低姿勢で従った）。

これは紛れも無く、景教流行碑の贋作の経緯を記したものです。そして景教流行碑の発見が当時のイエズス会宣教師たちにとって、どれほど有難いものであったかについては前述の通りです。すると「伊僧」＝「あの僧侶」という人物はイタリアから派遣されたイエズス会宣教師に違いありません。

ところで私たち日本人にとっては、このような回りくどい説明をされなくても、「伊僧」がイタリアの僧侶を表しているということは直ちに察しがつきます。イタリアという国名に充てる漢字は日本では「伊太利亜・伊太利・伊太里」等ですので、「伊僧」と記されたらすぐにイタリアの僧侶を連想するからです。しかし李之藻は中国の人です。中国ではイタリアは「意大里亜・意大里・意大利」等であって「伊」の一文字でイタリアを示唆するということはあり得ないのです。つまりここでの「伊僧」という表記は、日本を意識したものである可能性があるのです。そしてこのことは後の大規模な暗号の扉を開く鍵となるのですが、現時点では深入りせずに、とりあえずは続く「代景修孝則」の解説に進みましょう。

### 代景修孝則

この箇所は下から上に追えば意味が通じます。

「代景修孝則」→「則孝修景代」

「景代」は「景教の隆盛の時代」と解せます。つまり「則孝修景代」は「「孝」をたいせつにする中国の伝統にのっとり、景教の隆盛の時代を修正した」です。「孝」は「親につかえる行い」です。教父（宣教師）は信者（李之藻）にとって Father なのですから、信仰においての父親です。つまり「則孝」は「「孝」をたいせつにする中国の伝統にのっとり、信仰

における親である宣教師に従う」ということです。

## 則孝修景代

### 中国の孝の伝統にのっとり、 信仰における親である宣教師に従って、 景教の時代の見栄えをよくした

これはつまりは前出の「俾」という行為に対する説明です。既に紹介した通り明代の中国人は諸外国の人間に対して強い優越感を抱いていたわけです。たとえ信仰に厚い李之藻であっても、外国人に対して無条件に「俾」という行動をとるはずはないし、彼自身にとっても、そのようなことはあってはならない事だったはずです。つまり「則孝」は、先に示した「俾」という行為が「フン、まあ仕方がないな、手伝ってやるとするか！」という高慢な意識に基づくものであったのだ、と言っているのです。

実は「則孝」は高慢どころではない、もっとずっと嫌味な言い方なのです。「孝」は儒教の教えです。そして儒教が宣教師たちの説くキリスト教とはどうしても相容れないものであったことは、以前に引用した **Nanjing Missionary Case** から明白です。つまり「宣教師の連中は、何かと儒教を批判するが、結局は我々の儒教にすぎらずにはいられない程度の代物なのさ」ということです。そしてそういったことを表明するのに「則孝」のたった2文字しか用いないのです。こんなものにはせいぜい2文字で十分だ、と言わんばかりです。この種の嫌味はこれだけではありません。キリスト教と相容れない中国の伝統として儒教と並ぶものに、祖先に対する偶像崇拝があったわけですが、後述の解説箇所には、この祖先に対する偶像崇拝が強烈な形で登場します。実はこれらの嫌味は、後に述べる **De Semedo** の明朝に対する姿勢に対抗するものなのです。

李之藻にとってキリスト教以上に大切なのは自国の現実だったのです。彼にとってキリスト教は、それがどういう意味においてであるにせよ、明朝末期の行き詰った状況を打開する一つ的手段に過ぎなかったのです。心の底では、**他国の人間にもっともらしい口ぶりで自国の伝統について干渉されることなど、許しがたいこと**だったのです。このことは現代においても、総ての国の人々が抱えている本心だと思います。では今迄の解説をまとめましょう。

以令羅戢二悉震  
摸安秦詞非貴  
和載立作御虛風  
伊來獻之（伊僧者來家獻俾之）  
則孝修景代

命令によって二列に（文字を）連ね、

二列に（文字を）集めて（暗号として）封じたのだ。ことごとく驚く（だろうよ）。

ローマの言葉を真似たもので、貴重な物ではないのだ。

文字を記し建立することに協力し、（皇帝の国の）廃墟の趣に作った。

彼が来てこれを献じた（あの僧侶が家に来て献じ、これに低姿勢で従った）。

儒教の孝の教えにのっとり、

信仰における親である宣教師に従って、

景教の時代の見栄えをよくした（までき）。

このように並べてみると、

以令羅戢二悉震  
摸安秦詞非貴  
和載立作御虛風  
伊來獻之（伊僧者來家獻俾之）

が内容的に逆の順序になっていることに気がきます。

つまり正しくは

伊來獻之（伊僧者來家獻俾之）  
和載立作御虛風  
摸安秦詞非貴  
以令羅戢二悉震

です。ここで「代景修孝則」→「則孝修景代」という逆追いが、この逆順と符合していたことに気がきます。以上から結局、解読結果は次のようにまとめられます。

則孝修景代

伊來獻之（伊僧者來家獻俾之）

和載立作御虛風

摸安秦詞非貴

以令羅戢二悉震

儒教の孝の教えにのっとり、

信仰における親である宣教師に従って、

景教の時代の見栄えをよくした（までさ）。

彼が来てこれを献じた（あの僧侶が家に来て献じ、これに低姿勢で従った）。

文字を記し建立することに協力し、（皇帝の国の）廃墟の趣に作った。

ローマの言葉を真似たもので、貴重な物ではないのだ。

命令によって二列に（文字を）連ね、

二列に（文字を）集めて（暗号として）封じたのだ。

ことごとく驚く（だろうよ）。

「以令羅戢二悉震」、「摸安秦詞非貴」、「和載立作御虚風」、「伊來獻之（伊僧者來家獻俾之）」、「則孝修景代」の5つの句は、大月改定配置の5つのブロックに完全に対応しています。解読に際して登場した「独特な並べ替え」と「左隣による補助」は、それぞれが符合する同様な操作を得ました。このことは「以令羅戢二悉震」、「摸安秦詞非貴」、「和載立作御虚風」、「伊來獻之（伊僧者來家獻俾之）」、「則孝修景代」という解読の正しさのみならず、大月改定配置の元である「元鎮或隱十摧仁、賤聖帝國無寺。於大壇可撰雨皮、而臨從斯。救教真義道。」という解読の正しさをも保証します。このようにして整合性を得た大月改定配置の5つのブロックを今後は、上から順にA群、B群、C群、D群、E群と呼ぶことにします。

李之藻と結託して景教流行碑を捏造したのは、李之藻が（教）父と呼ぶ宣教師でした。この宣教師が一体誰なのかは後になって解ります。

## 大の月の解読（3）——日本に関する記述について——

### <「伊僧」の再考>

これ以降は専ら大月改定配置を扱うことになります。前述の通り大月改定配置の「伊僧」の正体は、どうみてもイエズス会の宣教師のはずです。それを「伊僧」と表記されると、ど

うしても「伊太利」という語を意識してしまいます。つまりここで日本語の漢字表記「伊」＝「伊太利」が用いられている可能性が大きいのです。注意深く眺めると「伊僧」と同じD群の1行目の10日に「餽」を得ます。先の

「饌」「披」→「食+巽」「手+皮」→「手+巽」「皮」→「撰」「皮」

に倣って、

「餽」→「食+委」→「委」→「人+委」→「倭」

とするような符合が予想されます。「餽」の月の文字のうち、ニンベンを持つ字は4日の「仁」のみです。この群の4日の列は

「仁親策也」＝「親しむ作戦だ」

です。先の「餽」に戻って、「伊僧」の場合と同様、二日分の行を追うと、

餽者

→→

能散

→→

戎於

→→

殿中

→→

↓

餽者能散戎於殿中

です。つまり

「餽者能散戎於殿中 仁親策也（親しむ作戦だ）」

↓

「倭者能散戎於殿中（日本はエビスを殿中から散らし得る）」

二親策也（「二」は策略に適合する）」

となります。「倭者能散戎於殿中」つまり「倭者能散戎於宮中」は明末当時の日本の鎖国政策と符合します。一方、「仁親策也」は明朝の政策と符合。さらに「二親策也」は「以令羅戢二」の2列と「伊僧」「餽者」の手法とに符合します。「二親策也」の「策」とは、この暗号設定自体を指しているわけです。

これらの強力な符合は、「伊僧（かの僧侶）」がイタリアの僧侶、つまりイタリアの宣教師を意味する日本語であることを示しています。つまり

**「伊僧者來家獻俾之」 = 「イタリアの宣教師が家に来て献じ、これに低姿勢で従った。」**

です。

### <日本に関する記述について>

実は先に解説した「仁親策也」と「餽者能散戎於殿中」に挟まれたD群には、明末当時の日本の実情がぎっしりと記述されているのです。この記述は「仁親策也」の右隣から始まります。以下に順を追って紹介します。

景門依仁施利每歳集四寺僧徒虔事精供備諸五旬餽者來而飯之寒者來而邁雖見親於臥内不自異於行間為公爪牙作軍耳目能散祿賜不積於家獻臨丹庭乃策名於王帳中書令汾陽郡王郭公子儀初總戎於朔方也肅宗俾之從之功用也大施主金紫光祿大夫同朔方節度副使試殿中監賜紫袞袿僧伊斯

まず「仁親策也」の右隣においては、「施於」つまり「～にほどこす」という2文字が、1列だけずれて、互いに向かい合うかたちで確認されます。

景門依仁施利每歳集四寺僧徒虔事精供備諸五旬餽者來而飯之寒者來而邁雖見親於臥内不自異於行間為公爪牙作軍耳目能散祿賜不積於家獻臨丹庭乃策名於王帳中書令汾陽郡王郭公子儀初總戎於朔方也肅宗俾之從之功用也大施主金紫光祿大夫同朔方節度副使試殿中監賜紫袞袿僧伊斯

## 大名利臥

景門依<sup>仁</sup>施利↓每歳集四寺僧徒虔事精供備諸五旬<sup>饑者</sup>來而飯之寒者來而  
邁雖見<sup>親</sup>於臥↓内不自異於行間為公爪牙作軍耳目<sup>能散</sup>祿賜不積於家獻臨  
丹庭乃<sup>策</sup>名↑於王帳中書令汾陽郡王郭公子儀初總<sup>戎於</sup>朔方也肅宗俾之從  
之功用<sup>也</sup>大↑施主金紫光祿大夫同朔方節度副使試<sup>殿中</sup>監賜紫袈裟僧伊斯

二つの「施於」に従い「大名利臥」の順に迫います。「利」は「もうけ、私利」。「臥」は「かくれすむ、隠遁する」こと。「大名利臥」は「大名の儲けは隠れ住む」、要するに

「大名利臥」＝「大名は儲けを隠す」

ということです。「大名」という語からこれが日本についての言及であることがわかります。

## 主王内每金帳不歳紫中自集光（主王内每金帳不載紫中自集金）

景門依<sup>仁</sup>施利<sup>每</sup>↑<sup>歳</sup>↑<sup>集</sup>↑四寺僧徒虔事精供備諸五旬<sup>饑者</sup>來而飯之寒者來而  
邁雖見<sup>親</sup>於臥<sup>内</sup>↑<sup>不</sup>↑<sup>自</sup>↑異於行間為公爪牙作軍耳目<sup>能散</sup>祿賜不積於家獻臨  
丹庭乃<sup>策</sup>名於<sup>王</sup>↑<sup>帳</sup>↑<sup>中</sup>↑書令汾陽郡王郭公子儀初總<sup>戎於</sup>朔方也肅宗俾之從  
之功用<sup>也</sup>大<sup>施</sup>主↑<sup>金</sup>↑<sup>紫</sup>↑<sup>光</sup>↑祿大夫同朔方節度副使試<sup>殿中</sup>監賜紫袈裟僧伊斯

「内」は「入れる、大事にする、ひそか、うちうち」。「毎」は「そのつど」。「帳」は「帳面、簿帳」。「歳」は「載に通じる」。その一方で「載」には「記す」という語義もある。つまり「帳不歳」→「帳不載」→「帳には載せず」です。「紫中」については、「紫微」＝「王宮」、「紫座」＝「天子の御座」、等により「紫中」＝「城の中」と解します。「自」は「みずから」。つまり「主王内每金帳不歳紫中自集光」＝「主王内每金帳不載紫中自集光」＝「主たる王はそのつどの金をしまいこんで、帳簿には記載せず、城の中に自分で光を集める」、です。この「光」というのはどうみても「金 (gold)」のこと。「金」と「光」は同列に一文字あけて並んでいますが、この調子で一文字おきに追うと「金光大同」が得られることがわかります。「大同」は成句で、「だいたいにおいて同じ」であること。これと符合するように、「大夫同」の「大」はその上の「汾」と「大同」であり、「夫」は男を意味する語として、その上の「陽」と「大同」です。以上からこの箇所では「光」＝「金」となります。「光」＝「金」という置き換えは後にもまた登場します。繰り返すようですが「金光大同」の「金」は「金 (money)」というより「金 (gold)」のこと。結局「主王内每金帳不載紫中自



集光」→「主王内毎金帳不載紫中自集金」→「主たる王はそのつどの金をしまいこんで、帳簿には記載せず、城の中に自分で金（gold）を集める」、です。

於令祿四異書

景門依仁施利毎歳集四↓寺 僧徒虔事精供備諸五旬饑者來而飯之寒者來而邁雖見親於臥内不自異↓於↓行間為公爪牙作軍耳目能散祿賜不積於家獻臨丹庭乃策名於王帳中書↓令↓汾陽郡王郭公子儀初總戎於朔方也肅宗俾之從之功用也大施主金紫光祿↓大夫同朔方節度副使試殿中監賜紫袈裟僧伊斯

「於」は「～により」。「令」は「ふれ、おきて、命ずる」。「祿」は「しるす」という意味。「於令祿四異書」＝「命令によって四つの異なる書を記す」です。この「於令」は「以令羅戢二悉震」の「以令」と符合します。小の月の末日の暗号文、大の月の末日の2行にわたる暗号文、そして目下のD群でこの「四異書」のうちの3つになります。後のE群の解読で、残り1つの「異書」が得られます。

徒間陽夫僧行汾大寺（徒間陽夫僧行紛大寺）

景門依仁施利毎歳集四寺↓僧↓徒↓虔事精供備諸五旬饑者來而飯之寒者來而邁雖見親於臥内不自異於 行↓間↓為公爪牙作軍耳目能散祿賜不積於家獻臨丹庭乃策名於王帳中書令 汾↓陽↓郡王郭公子儀初總戎於朔方也肅宗俾之從之功用也大施主金紫光祿 大↓夫↓同朔方節度副使試殿中監賜紫袈裟僧伊斯

「徒」は「なかま」の意味。「陽」は「積極的な、尊い」などの意味。この「陽夫」は後に出てくる「子作備・・・」の「子（男子の尊称）」に該当すると解するのが自然であることから、この「陽」は「尊い」という意味に解します。つまり「陽夫」は「尊い男」と解します。「汾」は「紛」と同じと解することがあります。このことを用いて「行汾大寺」は「行紛大寺」とします。そして「徒間陽夫僧行汾大寺」→「徒間陽夫僧行紛大寺」→「仲間のうちの尊い男、僧は大きな寺に紛れ込む」と解すのです。日本の仏教の僧侶が寺に行くのであれば、わざわざこうは記しません。鎖国政策の中のキリスト教の弾圧を考えれば、この「仲間のうちの尊い男、僧」はキリスト教の宣教師に違いありません。

## 同郡為虔

景門依<sup>仁</sup>施利每歳集四寺僧徒<sup>虔</sup>↑事精供備諸五旬<sup>饑者</sup>來而飯之寒者來而  
邁雖見<sup>親</sup>於臥内不自異於行間為<sup>為</sup>↑公爪牙作軍耳目<sup>能散</sup>祿賜不積於家獻臨  
丹庭乃<sup>策</sup>名於王帳中書令汾陽<sup>郡</sup>↑王郭公子儀初總<sup>戎於</sup>朔方也肅宗俾之從  
之功用<sup>也</sup>大施主金紫光祿大夫同<sup>同</sup>↑朔方節度副使試<sup>殿中</sup>監賜紫袈裟僧伊斯

実はD群中で、この箇所のみE群への言及となっています。「虔」は「つつしむ」。「同郡為虔」は「郡を同じくする。慎みの為にそうする。」、つまりは「**慎みをもって、同群に記す**」です。実はこの同群とはE群のことで、「慎みをもって、同群に記」される人物とは、「同郡為虔」の真下のE群の「元文封皇城」から始まる箇所に登場する Francis Bacon、唐の玄宗皇帝、キリスト、唐の初代皇帝李淵などなのですが現時点ではE群には深入りしないでおきます。この「同郡為虔」はD群中で境の役割を果たしており、同時にE群の解説への移行を促している箇所でもあるのです。

## 朔王公事

景門依<sup>仁</sup>施利每歳集四寺僧徒<sup>虔</sup>事<sup>事</sup>↑精供備諸五旬<sup>饑者</sup>來而飯之寒者來而  
邁雖見<sup>親</sup>於臥内不自異於行間為<sup>公</sup>↑爪牙作軍耳目<sup>能散</sup>祿賜不積於家獻臨  
丹庭乃<sup>策</sup>名於王帳中書令汾陽<sup>郡</sup>王<sup>王</sup>↑郭公子儀初總<sup>戎於</sup>朔方也肅宗俾之從  
之功用<sup>也</sup>大施主金紫光祿大夫同<sup>朔</sup>↑方節度副使試<sup>殿中</sup>監賜紫袈裟僧伊斯

「朔」は「こよみ」。つまり「朔王」とはカレンダー配置で得た前出の「主王」のこと。「公」は「みんなにうちあけ、みんなとともにすること」。つまり「**朔王公事**」＝「**主たる王は事を打ち明ける**」です。

## 精爪郭方

景門依<sup>仁</sup>施利每歳集四寺僧徒<sup>虔</sup>事<sup>精</sup>↓供備諸五旬<sup>饑者</sup>來而飯之寒者來而  
邁雖見<sup>親</sup>於臥内不自異於行間為<sup>公</sup>爪<sup>爪</sup>↓牙作軍耳目<sup>能散</sup>祿賜不積於家獻臨  
丹庭乃<sup>策</sup>名於王帳中書令汾陽<sup>郡</sup>王<sup>郭</sup>↓公子儀初總<sup>戎於</sup>朔方也肅宗俾之從  
之功用<sup>也</sup>大施主金紫光祿大夫同<sup>朔</sup>方<sup>方</sup>↓節度副使試<sup>殿中</sup>監賜紫袈裟僧伊斯

「精」は「鋭い」という意味。「郭」は「外側をへいや城壁でとりまいた町。または町の外

がこいのへい」のこと。「精爪郭方」は「郭に向かって爪を砥ぐ」という意味。この「爪」は原文の「爪牙」の「爪」で、武器を意味します。つまり「**精爪郭方**」は「**郭を攻めようと虎視眈々と狙っている。**」ということ。なおこの「郭」が中国を指していることが、後のE群の解説で明らかになります。

### 供牙

景門依仁施利每歳集四寺僧徒虔事精↓**供**↓備諸五旬**饑者**來而飯之寒者來而邁雖見親於臥内不自異於行間為公爪↓**牙**↓作軍耳目**能散**祿賜不積於家獻臨丹庭乃策名於王帳中書令汾陽郡王郭↓公 子儀初總**戎於**朔方也肅宗俾之從之功用也大施主金紫光祿大夫同朔方↓節 度副使試**殿中**監賜紫袈裟僧伊斯

「供」は「供給する、そなえる」という意味。「牙」は原文の「爪牙」の「牙」で、武器を意味します。「供牙」は「武器を供給する」という意味。「供牙公節」の「公節」からは別の文です。後に解ることですが、このことはE群で「氛人然・・・」というように「氛」から別の文になっていることに符合しています。文脈から考えて、「供牙」は「**供牙精爪郭方**」として「**武器をそなえて郭を攻めようと虎視眈々と狙っている。**」と解するのが自然です。

### 公節度子作備諸軍

景門依仁施利每歳集四寺僧徒虔事精**供** ↑**諸** ↓五旬**饑者**來而飯之寒者來而邁雖見親於臥内不自異於行間為公爪**牙** **作** ↑**軍** ↓耳目**能散**祿賜不積於家獻臨丹庭乃策名於王帳中書令汾陽郡王郭**公** ↓**子** ↑儀 初總**戎於**朔方也肅宗俾之從之功用也大施主金紫光祿大夫同朔方**節** ↓**度** ↑副 使試**殿中**監賜紫袈裟僧伊斯

「節度」は「さしづ、指令」のこと。「公節度」で一旦区切ります。「公節度」は「指令を打ち明ける」こと。つまりここから前出の「朔王公事」の「事」が記されているのです。「子作備諸軍」は「子は諸軍を作り備える」です。「諸軍を作る」ことができる「子」はコドモではなく「身分の高い者」のこと。文脈から先の「陽夫」と同一人物と解するのが妥当でしょう。「公節度子作備諸軍」は「指令を明かす。(それは)「子が諸軍を作り備える」(ということだ)。」です。「節度(指令)」は「使子作備諸軍」＝「子に諸軍を作らせ、備えさせる」というのと同じ。つまり「公」の対象である「節度子作備諸軍」は「使子作備諸軍」と同一です。機械的に眺めれば「節度」が「使」に該当していることとなります。このことと呼応するように、「節度」をさらにまっすぐに追うと「節度副使」となっているのです。「副」は

「分ける」という意味。「節度副使」は「節度」が「副使」であるということ。つまり本来ならば「使」の一字ですむ箇所、一字を二つに分けた二文字「節度」を充てており、そのことが「使」の一字を二つに分けたこと、つまりは「副使」である、という意味と解せます。この符合により、「公節備作子度」ではなく「公節度子作備」と追うべきこともわかります。「公節度子作備」に「諸軍」が続くこと、さらに「公節度子作備諸軍」に「供牙精爪郭方」が続き、結局「公節度子作備諸軍供牙精爪郭方」＝「指令を明かす。(それは) 子に諸軍を作り備えさせ、武器をそなえさせて、郭への攻略の準備をすることだ。」となることは明白です。

## 副儀

景門依仁施利每歳集四寺僧徒虔事精供備諸↓五旬餽者來而飯之寒者來而  
邁雖見親於臥内不自異於行間為公爪牙作軍↓耳目能散祿賜不積於家獻臨  
丹庭乃策名於王帳中書令汾陽郡王郭公子儀↑初總戎於朔方也肅宗俾之從  
之功用也大施主金紫光祿大夫同朔方節度副↑使試殿中監賜紫袈裟僧伊斯

「諸軍儀副」の「儀副」はトリックの入った別の文のエリアです。これは後のE群の解説において、変則的な配置「興乘康」に対する逆行指示であるところの「謝鏡」が「謝」の字から開始されていることに機能的にも位置的にも符合します。まず「儀副」も逆行させて「副儀」とします。「儀」は「様子、行儀、ならわし」という意味。「副」は「寄り合っ成一組をなす物 (の単位)」です。ここでの「副儀」は「寄り合っ成一組をなす追い方」を意味し、これは次に続く「五旬耳目總初試使」の横2文字ごとの追い方への指示となります。

## 五旬耳目總初試使 (吾旬耳目總初試使)

景門依仁施利每歳集四寺僧徒虔事精供備諸↓五旬餽者來而飯之寒者來而  
→→  
邁雖見親於臥内不自異於行間為公爪牙作軍↓耳目能散祿賜不積於家獻臨  
→→  
丹庭乃策名於王帳中書令汾陽郡王郭公子儀↑初總戎於朔方也肅宗俾之從  
←←  
之功用也大施主金紫光祿大夫同朔方節度副↑使試殿中監賜紫袈裟僧伊斯  
←←

これは「副儀」の指示によって得られる配置です。「旬」は「あまねし。ぐるりと行き渡る。また、そのさま。」です。「耳目」は「聞くことと、見ること」。「試」は「物を使ってみる」こと。「五旬耳目」に対して「初總試使」は横迫いの向きが逆ですが、これは「諸軍」と「副儀」が互いに逆向きであったことに対応しています。「五旬耳目總初試使」の「五」はどう見ても「吾」の意味。つまり「五旬耳目總初試使」→「吾旬耳目總初試使」＝「私が一通り聞いたり見たりしたことの総てを初めて使ってみる」です。

### < D群の解説のまとめ >

ここまでのD群の結果をまとめて記してみましよう。

#### 大名利臥

主王内毎金帳不載紫中自集光（主王内毎金帳不載紫中自集金）

〔於令祿四異書〕

徒間陽夫僧行汾大寺（徒間陽夫僧行紛大寺）

〔同郡為虔〕

朔王公事

公節度

子作備諸軍

供牙精爪郭方

五旬耳目總初試使（吾旬耳目總初試使）

大名は儲けを隠す

主たる王はそのつどの金をしまいこんで、

帳簿には記載せず、

城の中に自分で金（gold）を集めている。

〔命令によって四つの異なる書を記す〕

仲間のうちの尊い男、

宣教師は大きな寺に紛れ込む

〔慎みをもって、同群に記す〕

主たる王は事を打ち明ける。

指令を明かす。

（それは）宣教師に諸軍を作り備えさせ、

武器をそなえさせて、郭の攻略の準備をすることだ。

私が一通り聞いたり見たりしたことの総てを初めて使ってみた。

大名が、秘密に蓄えた資金と、弾圧を逃れてきた宣教師の知識とを用いて、軍備を備えて郭の攻略の準備に励んでいる、というこの情報が、明朝の一官僚に過ぎない李之藻の耳目によるものとはまず考えられません。この耳目の本人つまり「吾」を「五」として記された人物は、共謀者である前出の「伊僧」のはずです。「伊僧」については、「則孝」によって、それが教父の立場にある人物だということがわかっています。

### < 共謀者の特定 >

第一容疑者が De Semedo であることは既に述べました。彼の2つの漢名の半切を採って調べてみましょう。2つの漢名とは謝務祿と魯徳照です。

魯	籠	詞	謝
	五	夜	
徳	竹	莫謨罔微亡	務
	吏	候袍甫夫遇	
照	之	龍	祿
	笑	玉	

「徳・照」は反切を採ると「竹吏之笑」＝「竹吏の笑い」となります。「竹吏（ちくり）」は成句で「竹吏符（ちくりふ）」と同意で、漢代の割符のことです。この「竹吏之笑」の「竹吏」には2つの意味が隠れています。1つ目は「竹吏」＝「割符」→「暗号の符合」という意味です。務の5つの反切のうち、特に「微夫切」を採ると、謝務祿の3文字の反切は

詞 謝  
夜  
微 務  
夫  
龍 祿  
玉

となります。「玉龍」は成句で短剣のことですが、「龍玉」はその上下逆さまの状態です。つまり「垂れ下がった短剣」なのです。「夜微夫」、つまり「夜の微かな夫」という語の次に「龍玉」＝「垂れ下がった短剣」が続くという「語の羅列」すなわち「詞」は、思わず笑ってしまうような、ちょっと品の無い符合になっているわけです。この短剣の解釈は「薔薇の

封印『数学のいずみ』版 改定第3版」(5-20)の **Pyramus and Thisbe** の配置における「**Pyramus** の短剣」の意味と完全に符合します。ところで「薔薇の封印」には、この **Pyramus** の短剣と同様なものがもう一つありました。「薔薇の封印『数学のいずみ』版 改定第3版」の(18-9)です。(18-9)は「カップルの特定の行為」の他に、「竹吏」をも連想させるものでした。「竹吏之笑」の「竹吏」にはこのような意味も含まれているわけです。これが「竹吏」の2つ目の意味です。

次にこの「微夫」の符合において使用されなかった文字に着目しましょう。使用されなかったのは、謝務祿の側の「亡遇」「罔甫」「謨袍」「莫候」と魯徳照の側の「籠五」です。

「候」は「うかがう。そっとようすをのぞく。」、「甫」は「年長の男を呼ぶとき、その名につけることば。「父」と同じ。」です。まず謝務祿の側では

- 「亡遇」 = 「出会ってはいない」
- 「莫候」 = 「そっと様子を覗くな」
- 「罔甫」 = 「父を網で捕らえる」

です。遂に「甫」 = 「父」を見つけました。今、仮に

**De Semedo** = 「(教) 父」 = 「甫」

であるならば、**De Semedo** の名前の反切から得られた「罔甫」は「罔吾」と同じはずです。この「罔甫」 = 「罔吾」という予想と、魯徳照の側の「籠五」とを比較すると、「籠」は「網状」になっているということに気がきます。つまり

籠 五  
||  
罔 甫

かつ

罔 甫  
||  
罔 吾

となります。この関係は目下搜索中の教父の特徴だった「五」 → 「吾」と見事に符合します。

この見事な符合は

「伊僧」 = 「耳目の本人」 = Alvarus De Semedo

を導きます。De Semedo はポルトガル人ですが、カトリックの大本山はローマ教皇の居るイタリアですので、そのような意味で「伊僧」であるわけです。残された反切は「謨袍」です。これは

謨	言莫	莫
⇒	⇒	言 ⇒ 「包衣と言うな」
袍	衣包	包
		衣

となります。包衣は成句で「清の制度で、八旗の一種。満州語で僮僕（「僮僕」は「しもべ、めしつかい）」の意。清祖の入関以前に各部落から獲た捕虜を奴僕として使役したもの。」です。明末の満州族といえば、当時頭角を現しつつあった後金のことです。

謨	言莫	莫
⇒	⇒	言 ⇒ 「包衣と言うな」 = 「後金のしもべと言うな」
袍	衣包	包
		衣

です。後のE群には、De Semedo が明朝を批判し後金を支持するような記述が2度現れます。「後金のしもべと言うな」はそのことに対する符合となっているわけです。謝務祿と魯徳照の反切は無駄の無い、実に見事な暗号だったのです。



## 大の月の解読（４）——四異書の残り１つについて——

これ以降はE群を解読することになります。E群の暗号はD群と同様に、４日の列から始まります。

### D群

景門依仁施利每歳集四寺僧徒虔事精供備諸五旬餒者來而飯之寒者來而邁雖見親於臥内不自異於行間為公爪牙作軍耳目能散祿賜不積於家獻臨丹庭乃策名於王帳中書令汾陽郡王郭公子儀初總戎於朔方也肅宗俾之從之功用也大施主金紫光祿大夫同朔方節度副使試殿中監賜紫袈裟僧伊斯

### E群

願刻洪碑以揚休烈詞曰真主無元湛寂常然權輿匠化起地立天分身出代救度無邊日昇暗滅咸證真玄赫赫文皇道冠前王乘時撥亂乾廓坤張明明景教和宮敞朗遍滿中土真道宣明式封法主人有樂康物無災苦玄宗啓聖克修真威引駕聖日舒晶祥風掃夜祚歸皇室祚氛永謝止沸定塵造我區夏代宗孝義統極聿修明德武肅四溟文清萬域燭臨人隱鏡觀物色六合昭蘇百蠻取則道

### 修聖朗日碑（修景教碑）

願刻洪碑↑以揚休烈詞曰真主無元湛寂常然權輿匠化起地立天分身出代救度無邊日↑昇暗滅咸證真玄赫赫文皇道冠前王乘時撥亂乾廓坤張明明景教和宮敞朗↑遍滿中土真道宣明式封法主人有樂康物無災苦玄宗啓聖克修真威引駕聖↑日舒晶祥風掃夜祚歸皇室祚氛永謝止沸定塵造我區夏代宗孝義統極聿修↑明德武肅四溟文清萬域燭臨人隱鏡觀物色六合昭蘇百蠻取則道

「修聖朗日碑」は、「聖なる明るい日の碑を修正する」です。前に引用した広辞苑にもあった通り、「景教」とは「光り輝く太陽の教え」という意味です。つまり「聖朗日碑」は「景教碑」と同意と考えてよい。「修聖朗日碑」→「修景教碑」→「景教碑を修正する」です。この「修正する」というのは、以前の Jacques Rho の漢名「羅雅谷」の反切から得られた「良何加於古祿」の「加於古祿」に符合します。つまり100%の捏造ではなく、あくまで加筆による修正なのです。

以昇遍日明揚暗滿舒（以昇日遍明揚暗滿舒）

願刻洪碑以↓揚↓休烈詞曰真主無元湛寂常然權輿匠化起地立天分身出代救  
 度無邊日昇↓暗↓滅咸證真玄赫赫文皇道冠前王乘時撥亂乾廓坤張明明景教  
 和宮敞朗遍↓滿↓中土真道宣明式封法主人有樂康物無災苦玄宗啓聖克修真  
 威引駕聖日↓舒↓晶祥風掃夜祚歸皇室祚氛永謝止沸定塵造我區夏代宗孝義  
 統極聿修明↓德 武肅四溟文清萬域燭臨人隱鏡觀物色六合昭蘇百蠻取則道

「遍」は「あまねし。まんべんなく広がる。全体にいきわたったさま。」です。  
 「以昇遍日明」は要するに「以昇日遍明」＝「昇る太陽といきわたる明るさによって」です。

この句には「景教の徳によって」という意外にも「(太陰暦ではなく) 太陽暦 (グレゴリオ暦) のカレンダー配置によって」という意味が重ねられています。「揚」は「高く持ちあげて、明らかにする。堂々と世にあらわす。」こと。「暗」は「ひそかに」。「舒」は「敍」に通じます。「敍」は「ならび。行列。次第を追って陳述する」です。「揚暗滿舒」は「ひそかに満ちることばの並びを明らかにする。」です。つまり「**以昇遍日明揚暗滿舒**」→「**以昇日遍明揚暗滿敍**」→「**昇る太陽といきわたる明るさによって、ひそかに満ちることばの並びを明らかにする**」です。我々の目下の大月改定配置は太陽暦 (グレゴリオ暦) のカレンダー配置が原型になっているので、「昇る太陽といきわたる明るさによって」というのは、「(太陰暦ではなく) 太陽暦 (グレゴリオ暦) のカレンダー配置によって」、もしくは「**カレンダー配置 (に基づく大月改定配置) において、日が進むように左から右へと追うことによって**」という意味です。

陶淵李淵明——陶淵明と李 (之藻)

願刻洪碑	以	揚	休	烈	詞曰真主無元湛寂常然權輿匠化起地立天分身出代救
度無邊日	昇	暗	滅	咸	證真玄赫赫文皇道冠前王乘時撥亂乾廓坤張明明景教
和宮敞朗	遍	滿	中	土	真道宣明式封法主人有樂康物無災苦玄宗啓聖克修真
威引駕聖	日	舒	晶	祥	風掃夜祚歸皇室祚氛永謝止沸定塵造我區夏代宗孝義
統極聿修	明	德	武	肅	四溟文清萬域燭臨人隱鏡觀物色六合昭蘇百蠻取則道

← ←

「徳武」は右から追うと「武徳」で、唐の初代の皇帝である李淵の時代の元号になります。  
 「徳武」は「武徳」の逆なので「徳武」＝「淵李」と解します。

実は

休烈  
滅咸  
中土  
晶祥  
肅

という配置は「せともの」つまり「陶」の製作工程を表しているのです。まず「烈」は「火のいきおいがつよい」こと。「咸」は「みな。あまねし。」です。「土中」に着目しましょう。この上に「烈咸」と「休滅」があります。これはつまり「土中」から得られた粘土を原料とするものを窯で焼くことを示しています。窯の中ですべて烈火を浴びた後、窯の中で「休」ませて熱を「滅」じる、と解せます。「晶」は「水晶の略称」。これはつまり他のどこかに「水」つまりサンズイがつくことを予告しています。「土中」の下に水晶とともにあるのは「祥」。「祥」は「吉。前兆。」です。器になる以前の粘土の状態を「祥」＝「前兆」と表現しているのです。さらに「祥」はその下の「肅」と関係付けられています。肅は「聿」と「淵」の合字です。「淵」は「淵」の古字。先程の「水」＝「サンズイ」は「淵」で使われるわけです。「聿」は「手が早く巧みなこと。」です。

祥 ⇒ 祥  
肅 聿

淵 ⇒ 淵

と考えれば、これは「こねて形を整えた粘土に「祥」＝「吉」を「聿」する、つまり縁起のよい文字や絵などをすばやく絵付けする」ということ。一方「淵」は、「淵」の古字

「淵」が「淵」に変わることを意味します。「古い時代の字→後の時代の字」という時間的推移は、『薔薇の封印』でお馴染みのものであり、焼かれるまえの状態である「淵」に対して「聿」が行われ、釉薬で少々濡れた状態が「淵」だ、ということです。焼かれた結果、「陶器」である「淵」、つまり「陶淵」が完成するわけです。以下に示す枠内が「陶淵」を

もたらずわけですが、これに先の「徳武→淵李」と、その左隣の「明」を続けると……

願刻洪碑	以	揚	<b>休</b>	<b>烈</b>	詞曰真主無元湛寂常然權輿匠化起地立天分身出代救
度無邊日	昇	暗	<b>滅</b>	<b>咸</b>	證真玄赫赫文皇道冠前王乘時撥亂乾廓坤張明明景教
和宮敞朗	遍	滿	<b>中</b>	<b>土</b>	真道宣明式封法主人有樂康物無災苦玄宗啓聖克修真
威引駕聖	日	舒	<b>晶</b>	<b>祥</b>	風掃夜祚歸皇室祆氛永謝止沸定塵造我區夏代宗孝義
統極聿修	<b>明</b>	<b>徳</b>	<b>武</b>	<b>肅</b>	四溟文清萬域燭臨人隱鏡觀物色六合昭蘇百蠻取則道
	↓	↓	↓	↓	
	<b>明</b>	<b>淵</b>	<b>李</b>	<b>淵</b>	<b>陶</b>

「陶淵李淵明」という、「陶淵明」と「李淵」を組み合わせたものが出来上がります。「陶淵李淵明」では「李」の両側に「淵」があるのですが、「李」の反切は両耳切です。その一方で、「淵」の反切は繁玄切と一均切。「均」は「ひとしい」こと。成句「均一」も「等しい」という意味です。「両耳」と「一均」は、「李」の「両耳」の位置に「均一」な「淵」があることと符合します。一方「繁」は「まつわる。からむ。」であり、「玄」は「くらむ。目くるめく。」です。「繁」と「玄」は、2人の名前がからんで、「陶淵李淵明」という目がくらむような状態になっていることと符合します。

贋作を予定している「陶淵明」の名前の間に、なぜ「李之藻」ではなく「李淵」という名を挟んだのでしょうか。自分の名前「李之藻」を挟むなどという、そこまで破廉恥なことはさすがに恐れ多くてできなかつたのはわかります。しかし「李之藻」の代わりに挟む人名が、なぜ「李淵」でなければならなかつたのでしょうか。実は後になって「李之藻」が「李淵」を自分の祖先として廟に祀るという話が登場するのです。つまり、彼は（おそらくは単に同姓だからということでしょうが）自分が唐の皇帝の子孫だ、と主張しているのです。偉大な「陶淵明」と、崇める祖先である「李淵」をからめて記すことは、まさに「同郡為虔」です（なお「同郡為虔」はこの後もE群の広範囲に亘ってなされていることが後にわかってきます）。また、前述のとおり李淵は唐の初代の皇帝。つまり「朔王」です。これによって上記の「明淵李淵陶」が「朔王公事」のもう1つの意味だったことがわかります。「明德武肅」→「明淵李淵陶」によって、李之藻の姓「李」がE群最下行7日目に位置することになります。そのように替えた上で大月改定配置の各群最下行7日目を上から順に追うと、「浴徳以主李」となります。「浴徳以主」は「主（キリスト教の神）によって徳に浴す」であり、また「浴徳以主李」は「（執筆者という意味での）主人の李（之藻）によって（解説者が）徳に浴す」でもあるわけです。



を除去して得られる文と解せます。「赫赫」の横の並びに従って、上に掲げた矢印の向きに追うと、「主無明式歸祚萬清」を得ます。「式」は「おきて。法律。」のこと。「祚」は「天子の位」。「主は明の法律を無視し、天子の位を満州族の清に返す」。です。景教流行碑の碑文を贋作した当時は、まだ「清」という国名は無く、太祖（ヌルハチ）の「後金」の時代です。「(後)金」が国名を「清」に改めるのは、太祖（ヌルハチ）の後を継いだ太宗（ホンタイジ）の代で、1636年のことです。しかし「歸祚」つまり「天子の位を返す」というのは、南宋に対峙していた当事の「金」を意識しての語として(実際「後金」はこの「金」の末裔であることを意識した国名です)、実に的確な表現であることに気付きます。ここで「主無明式歸祚萬清」を得た文字の追い方「→→←←→→←←」が、「吾旬耳目總初試使」を得た時の追い方と一致していることに注意しましょう。

## 五旬

→→

## 耳目

→→

## 初總

←←

## 使試

←←

「吾旬耳目總初試使」はイエズス会宣教師 De Semedo の（立場から記された）言葉だったことを考えれば、「主無明式歸祚萬清」は De Semedo の主張であることになります。そしてこのことは、前出の「莫言包衣」＝「後金のしもべと言うな」と見事に符合します。宣教師が語っているのですから、「主無明式歸祚萬清」の「主」はキリスト教の神のことです。宣教師 De Semedo は自分たちを迫害する明朝に強い敵意を抱いていたわけです。

この「萬清」を素直に受け止めれば、碑文贋作の当事から、後金が天下を平定した暁には国号を「清」に改める、という計画が、後金の指導者の胸中にあったということになります。国名「清」が De Semedo の（立場からの）言葉として記されていることから、この宣教師が後金の指導者と何らかの繋がりを持っていた可能性が考えられます。

ただし漢字「清」は「道家の語で、理想的世界のこと」です。「主無明式歸祚萬清」と記した李之藻が「清」を単に「(De Semedo にとっての) 理想的世界」の意味に用い、後の後金の指導者もまた、そのような意味合いから国号を改めた結果、たまたま「歸祚萬清」がその後の史実と符合した、とも考えられるのです。

「玄宣（夜）文主無（赫赫）明式歸祚萬清」→「天宣文神無明式歸祚萬清」＝「天はみこ

とのりをする、「神は明の法律を無視し、天子の位を満州族の清に返す。」と。」です。そして「武祥真真真」は、サルフの戦いをはじめとする明軍と後金の武力衝突を指しているわけです。つまり「武祥真真真」＝「大戦の兆しは確かだ確かだ確かだ！」となります。

**真玄宣夜文詞曰真證道真風掃四溟**

願刻洪碑以揚休烈	<b>詞曰 真</b>	主無元湛寂常然權輿匠化起地立天分身出代救
	→→	→→
度無邊日昇暗滅咸	<b>證真 玄</b>	赫赫文皇道冠前王乘時撥亂乾廓坤張明明景教
	←←	
和宮敞朗遍滿中土	<b>真道 宣</b>	明式封法主人有樂康物無災苦玄宗啓聖克修真
	←←	→→
威引駕聖日舒晶祥	<b>風掃 夜</b>	祚歸皇室祆氛永謝止沸定塵造我區夏代宗孝義
	→→	←←
統極聿修明德武肅	<b>四溟 文</b>	清萬域燭臨人隱鏡觀物色六合昭蘇百蠻取則道
	→→	←←

実は先の「四風真證詞、曰真道掃溟」の箇所には、自国の国中を巻き込む内戦をそそのかす外国人 De Semedo に対する李之藻による批判「詞曰真證道真風掃四溟」が、上掲の通り De Semedo のことばと向かい合うように記されています。「真證道」つまり「真證の道」とは「確かな証拠に基づく方策」です。「真風」は成句で「真実の教化。正しい風俗。」のこと。「溟」は「海。大海原。」ですから、「四溟」は成句で「四海」＝「四方の海」と同じです。その一方で「四海」には「四方のエビス(異民族)」という意味もあります。このことから「四溟」→「四海」→「四方のエビス(異民族)」と解します。すると「**詞曰真證道真風掃四溟**」は「**言う、「確かな証拠に基づく方策、正しい教えは、四方の異民族を一掃する。」**」です。中国を虎視眈々と狙う倭人(「精爪郭方」、遼東方面から挑む女真族(「武祥真真真」、そしてそれに加勢したがる南蛮(「主無明式、歸祚萬清」)等をすべて蹴散らすことこそ正しい教えだ、ということなのです。

「詞曰」という始まり方は、他の句から続く句であることを示唆しています。実は「詞曰真證道真風掃四溟」は、「玄真」の反切から続くものなのです。「真玄宣夜文」の5文字総てについて反切を採ってみましょう。『大漢和辭典』の集韻反切の登場順で記せば、「真」は之人切、「玄」は胡涓切、「宣」は荀縁切と許元切、「夜」は夤謝切と夷益切、「文」は無分切と文運切と眉貧切です。このうち「夜」の二つの反切の順序だけを入れ替えると次の通りです。

之	真
人	
胡	玄
涓	
許	荀
元	縁
夤	夷
謝	益
眉	文
貧	運
	分

まず「夜」と「文」については、「夜文」の順にそれぞれの反切を追うと

「夷益無分」＝「夷の利益は分かれぬ」→「夷は利益を分けぬ」

「夤謝文運」＝「つつしみおそれ文運を感謝する。」

→「よくぞ解説してくれた、ありがとう！」。

「眉貧」＝「へり（辺境）は貧しい」。

です。つまり「夤謝文運」という感謝の言葉を除けば、「夷益無分眉貧」＝「異民族どもが交易の利益を独占しているため、（異民族の領域に面している）国内の辺境地帯は貧しい」です。次に「宣」の反切について。「荀縁」では意味不明ですが「縁」が「眉」と同じ「へり」を意味することが解説のポイントです。「荀」は須倫切。つまり

「荀縁」→「須倫縁」＝「守るべき秩序がへり（辺境）には必要だ」

です。「夷益無分、眉貧」なのだから秩序が必要だ、ということです。そして「縁」の反切にはもう一つ、もっと具体的な状況が記されているのです。「縁」は余專切と兪絹切。

兪	余	縁
←	←	
絹	專	
←	←	

の順に追えば、「余兪專絹」＝「その他の異民族はますます絹を独占するようになってきて



いる。」です。「余」＝「その他の異民族」とするのは、つまりは複数の辺境で交易の利益をむさぼる異民族どもが居て辺境は貧しいのだ、ということになります。この「絹」はシルクロードとマルコ・ポーロの父親の商隊等を連想させます。彼らは元の時代の商人だったわけですが、そのことに符合するように「宣」のもう一つの反切は許元切です。「許元」を下から読めば「元許」、つまり「**元朝はそのような異民族を許した**」ということになります。

続く「真」「玄」2文字の反切は、下から「許元」を読んだ向きに倣って、「玄」「真」の順に追います。単に直線的に追うのではなく、先の「縁」の2つの反切に倣って追うのです。

真 玄  
之 胡  
← ←  
人 涓  
← ←

こうして「胡之涓人」を得ます。「涓人」は成句で宮廷の掃除を司る役人のことです。「胡之涓人」という表し方では、異民族の人である「涓人」、とも解せそうですが、先の「詞曰真證道真風掃四溟」の「四溟」の解釈との符合を考えれば、

### 「胡之涓人」＝「朝廷の側に立ち、異民族を一掃する人」

と解するのが自然です。以上から「**胡之涓人詞曰真證道真風掃四溟**」＝「**異民族を一掃する人は言う、「確かな証拠に基づく方策、正しい教えは、四方の異民族を一掃する。」**」を得ます。「胡之涓人」は無論、De Semedoの厚かましさに対して激怒する李之藻自身です。

### 元文封皇城

願刻洪碑以揚休烈詞曰真主無元↓湛寂常然權輿匠化起地立天分身出代救  
度無邊日昇暗滅咸證真玄赫赫文↓皇道冠前王乘時撥亂乾廓坤張明明景教  
和宮敞朗遍滿中土真道宣明式封↓法主人有樂康物無災苦玄宗啓聖克修真  
威引駕聖日舒晶祥風掃夜祚歸皇↓室祚氛永謝止沸定塵造我區夏代宗孝義  
統極聿修明德武肅四溟文清萬域↓燭臨人隱鏡觀物色六合昭蘇百蠻取則道

この箇所は前述の通り、D群の「同郡為虔」の真下。この「元文封皇城」からしばらくは、Francis Bacon と Elizabeth Tudor についての記述が続きます。

「元文封皇城」は「もとの文は王室のエリアに封ぜられている」、つまり「もとの文は Royal Secret だ」ということ。この「元文」は『薔薇の封印』の秘密を指します。このことは続く箇所の変意から判明します。

### 燭室法皇湛寂

願刻洪碑以揚休烈詞曰真主無元湛↑寂↓常然權輿匠化起地立天分身出代救  
度無邊日昇暗滅咸證真玄赫赫文皇↑道 冠前王乘時撥亂乾廓坤張明明景教  
和宮敞朗遍滿中土真道宣明式封法↑主 人有樂康物無災苦玄宗啓聖克修真  
威引駕聖日舒晶祥風掃夜祚歸皇室↑祚 氛永謝止沸定塵造我區夏代宗孝義  
統極聿修明德武肅四溟文清萬域燭↑臨 人隱鏡觀物色六合昭蘇百蠻取則道

「燭」は「ろうそくの火」。「法」は「制度、道理」。「法皇」は「道理上の皇帝」、つまりは「帝位に就くはずの人」Francis Bacon。この「法皇」は後出の「權王」と対照的な存在です。「燭室法皇湛寂」は「ろうそくの火がともる部屋で帝に就くはずの人は寂しさに沈んでいる」ということ。「法皇」の「法」は、Francis Bacon が法律方面の高官であったことを意識した文字でもあります。「皇」は厳密には、単なる王ではなく「開祖の偉大な」王です。李之藻も受け継いでいるところの、この暗号の性質、つまり「符合によって段階的に進展すること」を暗号の規律つまり「法」と捉えるならば、この暗号システムの創始者であろうFrancis Bacon は「開祖の偉大な」人のわけです。「法皇」にはそのような意味も込められています。

### 道主祚臨常冠人

願刻洪碑以揚休烈詞曰真主無元湛寂 常↓然權輿匠化起地立天分身出代救  
度無邊日昇暗滅咸證真玄赫赫文皇道↓冠↓前王乘時撥亂乾廓坤張明明景教  
和宮敞朗遍滿中土真道宣明式封法主↓人↓有樂康物無災苦玄宗啓聖克修真  
威引駕聖日舒晶祥風掃夜祚歸皇室祚↓氛 永謝止沸定塵造我區夏代宗孝義  
統極聿修明德武肅四溟文清萬域燭臨↓人 隱鏡觀物色六合昭蘇百蠻取則道

「道」は「信仰をもとにした組織」のこと。後に続く文脈からこの場合「道主」とはイギリス国教会の創始者 Henry VIII世を指すと解するのが妥当です。「祚」は「地上のわざわい」。「臨」は「見下ろす、尊いものが卑しいものところにゆく」です。「冠」は「冠をかぶる」ことなので、「常冠人」とは常に冠をかぶっている人、つまりは王のこと。「道主祚臨常

冠人」は「Henry VIII世の禍は王にふりかかる」という意味。「常冠人」という表現は、ただいつも冠をかぶっているだけであり王とは認めないぞ、という態度での言い方。単なる禍ではなく王の禍が、王とは認めまいとする人に向かうわけなので、「尊いものが卑しいものところにゆく」という「臨」が使われているわけです。この「常冠人」は後に「氛人」とも「權王」とも記されます。後出の「權王」の振る舞いの描写は明らかに陽気な女性のしぐさです。つまり「常冠人」は Elizabeth I世と解するのが妥当です。「常冠人」を王として認めないこの姿勢は、つまりは前出の「法皇」に加勢する立場です。なぜ「常冠人」を王として認めないのか。則天武后が皇帝とは見なされていない、という例が後に遠まわしな形で出現することを考えると、「常冠人」が女性だから王として認めないということ。つまり「**道主 氣臨常冠人**」は「Henry VIII世の禍は Elizabeth I世にふりかかる」ということですが、この「Henry VIII世の禍」というのは、彼の有名な好色を非難しているのではなく、男子の世継ぎを残さなかったことを指しているのです。結局「**Elizabeth I世の不運の原因、つまり母親である前に女王でなければならなかったという不幸の原因は、Henry VIII世が男子の世継ぎを残さなかったことにあったのだ**」、という意味です。

**氛人然前有永隠**

願刻洪碑以揚休烈詞曰真主無元湛寂常 **然** ↓ 權輿匠化起地立天分身出代救  
 度無邊日昇暗滅咸證真玄赫赫文皇道冠 **前** ↓ 王乘時撥亂乾廓坤張明明景教  
 和宮敞朗遍滿中土真道宣明式封法主人 **有** ↓ 樂康物無災苦玄宗啓聖克修真  
 威引駕聖日舒晶祥風掃夜祚歸皇室祆**氛** ↓ **永** ↓ 謝止沸定塵造我區夏代宗孝義  
 統極聿修明德武肅四溟文清萬域燭臨**人** ↓ **隠** ↓ 鏡觀物色六合昭蘇百蠻取則道

「氛」は「悪い気、妖気」。つまり「氛人」＝「常冠人」＝「Elizabeth I世」。「然前」は「それ以前に」という意味。「それ」とは、「母親であることを諦めて、王としての職務に専念する道を選んだ時」のことです。「**氛人然前有永隠**」は「**妖気の人**は**それ以前に長く姿を見せない時期があった**」という意味。Elizabeth I世は天然痘にかかり、治癒のために長く姿をみせず、そのため崩御すら噂されたことがありました。Shakespeare=Baconを主張する研究者の中には、この事件を、実は天然痘の治癒ではなく出産のために姿を見せなかったのではないかと考える人もいます。李之藻のこの表現も同様な疑いと解せます。

権王樂謝鏡康乘輿止觀匠時物

願刻洪碑以揚休烈詞曰真主無元湛寂常然權↓輿↑匠↓化起地立天分身出代救  
度無邊日昇暗滅咸證真玄赫赫文皇道冠前王↓乘↑時↓撥亂乾廓坤張明明景教  
和宮敞朗遍滿中土真道宣明式封法主人有樂↓康↑物↓無災苦玄宗啓聖克修真  
威引駕聖日舒晶祥風掃夜祚歸皇室祆氛永謝↓止↓沸 定塵造我區夏代宗孝義  
統極聿修明德武肅四溟文清萬域燭臨人隱鏡↓觀↓物 色六合昭蘇百蠻取則道

「權」は「間に合わせ、かりそめ」。「権王」は前出の「法皇」に対比させた語。「樂」は「たのしむ」。「謝」は「あいさつする、言葉をかける」。「権王樂謝鏡」は「かりそめの王は楽しそうに鏡に挨拶する」です。「かりそめの王」というのは、女性でありながら王となっている Elizabeth I 世のこと。「樂謝鏡」というたった三文字で女性の享乐的な振る舞いを見事に表しています。続く「輿乗康」も同様な振る舞いを記したのですが、逆順に「康乗輿」と追う箇所です。「鏡に挨拶する」が逆順に追うべき指示として機能しているわけです。鏡に挨拶する姿は反対に映るということから、前後を逆にするわけです。「康」もやはり「たのしむ」という意味。「康樂」は成句で「楽しみに耽ること」です。「輿」は「こし」、つまり「みこし」のこと。「止」は「やめる」、「觀」は「ながめる、見る」、「匠」は「細工師」。「権王樂謝鏡輿乗康止觀匠時物」→「権王樂謝鏡康乘輿止觀匠時物」=「かりそめの王は楽しそうに鏡に挨拶し、楽しみに耽って御輿に乗り、細工師になった時の物を見るのを止めてしまう。」です。「匠時物」=「細工師になった時の物」とは Francis Bacon が Shakespeare として記した台本です。「権王樂謝鏡康乘輿」は前出の「燭室法皇湛寂」と見事な対照をなしています。注意すべきは「樂謝鏡康乘輿」が Elizabeth Tudor の自然な姿・心の表れではなく、そのようにはしゃぐのは彼女が「氛人」、つまり妖気にとりつかれている状態にあるからだ、としている点です。

沸物化撥無定色起亂 (沸物化發無定色起亂)

願刻洪碑以揚休烈詞曰真主無元湛寂常然權輿匠 化↓起↓地立天分身出代救  
度無邊日昇暗滅咸證真玄赫赫文皇道冠前王乘時 撥↓亂↓乾廓坤張明明景教  
和宮敞朗遍滿中土真道宣明式封法主人有樂康物 無↓災 苦玄宗啓聖克修真  
威引駕聖日舒晶祥風掃夜祚歸皇室祆氛永謝止沸↓定↓塵 造我區夏代宗孝義  
統極聿修明德武肅四溟文清萬域燭臨人隱鏡觀物↓色↓六 合昭蘇百蠻取則道

この「沸物」は2通りの意味にとれます。「沸」は「沸騰する」です。「沸声」は「騒ぎた

つ声」。つまり「匠時物」が Shakespeare の台本である一方で、「沸物」は Shakespeare の芝居をも意味し得るのです。「止観匠時物沸物」は「台本も芝居も見なくなってしまう」ということですが、Elizabeth I 世の芝居好きは有名ですので、「止観」は「沸物」には及ばないものと捉えるべきです。

一方「沸物」＝「沸騰する物」でもあります。「沸物化撥無定色起亂」にはこの意味で「沸物」が使われます。「沸物」に2義の可能性があることは、D群の対応する箇所が「儀副」→「副儀」＝「ペアをなすならわし」であることと符合します。なお「沸亂」は成句で「わき立ちみだれる」ことです。「化」は「ばける、なりかわる」。「撥」は「「發」に通じる」であり、さらに「發」は「はなつ」です。つまり「撥」→「發」によって、「沸物化撥無定色起亂」→「沸物化發無定色起亂」＝「沸き立つものは変化し、定まらない色を発して乱れを起こす」です。これはまさに錬金術つまり化学の実験風景の描写です。「發無定色」はとても不気味です。前出の「權王」の享樂的な情景描写と同様、まるで映画に出てきそうな光景です。「撥」→「發」によって、手ヘンが余ったことに留意しましょう。この手ヘンは後になって他の箇所で使われることになります。

### 災塵造苦乾地

願刻洪碑以揚休烈詞曰真主無元湛寂常然權輿匠化起 地↑立天分身出代救  
 度無邊日昇暗滅咸證真玄赫赫文皇道冠前王乘時撥亂 乾↑廓坤張明明景教  
 和宮敞朗遍滿中土真道宣明式封法主人有樂康物無災↓苦↑玄宗啓聖克修真  
 威引駕聖日舒晶祥風掃夜祚歸皇室祆氛永謝止沸定塵↓造↑我區夏代宗孝義  
 統極聿修明德武肅四溟文清萬域燭臨人隱鏡觀物色六 合 昭蘇百蠻取則道

「災塵六・・・」とすると意味不通です。落ち着いて付近を眺めると「六合」と「玄宗」に気がきます。「玄宗」は唐の六代目の皇帝ですので「六合」と符合します。「貢子」の解説においてはどうしても余ってしまう「六」が、「莫六」＝「六」するなかれ」として片付けられていたことを思い出しましょう。現時点においても、これに倣って「六合」と「玄宗」を「莫」として、つまり削除して考えます。すると「災塵造苦乾地」を得ます。「災」は「わざわざ、大きな火事、火元の知れない火事」。「塵」は「つちけむり」。「苦」は「はなはだ、程度が激しくてひどい」です。「災塵造苦乾地」は「災いの煙はひどく枯れた土地を作り出す」です。無謀な化学実験が、今で言う公害を引き起こす、ということ。李之藻の先見の目には驚かされます。

立我昭廓天坤區蘇

願刻洪碑以揚休烈詞曰真主無元湛寂常然權輿匠化起地立↓天↓分身出代救  
度無邊日昇暗滅咸證真玄赫赫文皇道冠前王乘時撥亂乾廓↓坤↓張明明景教  
和宮敞朗遍滿中土真道宣明式封法主人有樂康物無災苦[玄] [宗] 啓聖克修真  
威引駕聖日舒晶祥風掃夜祚歸皇室祆氛永謝止沸定塵造我↓區↓夏代宗孝義  
統極聿修明德武肅四溟文清萬域燭臨人隱鏡觀物色六合昭↓蘇↓百蠻取則道

「立」は「たてる」。「廓」は「或いは郭につくる」です。「昭」は「祖先をまつる廟の順序の名。始祖（『大漢和辭典』では「太祖」としています）廟を中央に置き、初代をその左に置いて「昭」といい、その子を右に置いて穆（ボク）という。」です。「立廓我昭」はそのままで「郭（城壁がとりまく町）を私の初代の祖先の廟に立てよ」です。これは文章としておかしい。正しくは「立我昭廓」つまり「私の初代の祖先の廟を郭（城壁がとりまく町）に立てよ」のはずです。「天」に対して「坤」は「つち、地。」であり、「區」は「天と地でくぎられた世界。この世の中。」です。「天坤區蘇」は「天と地でくぎられたこの世が蘇る」ということ。「天・坤・區」の三つの上下の位置関係は「天（そら）」が上、「坤（つち）」が下、「區（くぎり）」が中です。つまり「天坤區」という句では三者が上から「上下中」の順に並んでいるのです。正しい上下の位置関係は「天・區・坤」の順。そして「天・坤・區」→「天・區・坤」と「立・廓・我昭」→「立・我昭・廓」は同じ語順での入れ替えです。つまり「天坤區」は「立廓我昭」→「立我昭廓」とすることへの符合となっているのです。「立廓我昭天坤區蘇」→「立我昭廓天坤區蘇」→「私の初代の祖先の廟を郭（城壁がとりまく町）に立てよ。天と地でくぎられたこの世が蘇る。」です。「武徳」という年号の出現、そして「六合」と「玄宗」の符合を考慮すると、「我昭」の「我」は李之藻であり、「我昭」は李淵の廟であるはずで、そして前述の3つの廟の建て方に従えば「我昭」は老子廟の左隣に建てられるはずで、つまり「立我昭廓」の「廓」=「郭」は中国を指しているわけであり、前出の「精爪郭方」は「中国に向かって爪を研ぐ」ということだとわかります。

吾少止。吾早在隣地。寒居故苦、停至七年、将来。

莫言奔。

直執玄宗。

剛豕千千

前出の「天坤區」の「天坤」というのは、普通は「天地」、もしくは「乾坤（けんこん）」とするところです。「天坤」という組み合わせの一方で、「乾」が「災塵造苦乾地」において

「乾地」として使われていたことに気付きます。無論「災塵造苦乾地」の「乾地」は「天地」の意味ではなく、乾いた土地であるわけですが、このコミカルなもじりは、何か別の暗号の端緒の存在を匂わせます。「坤」の反切は「枯昆切」です。「昆」は「あに、なかま」であり、一方「乾」と「枯」はどちらも「枯れる」ということです。つまり「乾」＝「枯」。これによって「坤」→「枯昆」→「「枯」のなかま」→「「乾」のなかま」となり、これは「乾坤」が成句であることと符合します。この符合が我々にとって、反切を意識した上で「坤」の字から「災塵造苦乾地」までさかのぼらせる、つまり逆追いさせる契機となります。元のE群のテキストの文字の順に戻って、「災塵造苦乾地立廓我昭天坤」のそれぞれの文字の集韻の反切を採ると次の通りです。

	将	災
	来	
	停	塵
	年	隣
倉	在	造
刀	早	至
	苦	苦
	故	五
	居	乾
	寒	焉
		徒
		地
		二
		力
		立
		入
		闊
		廓
		鑊
		語
		我
		可
之	止	昭
笑	少	遥
	鐵	天
	因	他
		年
		坤
		枯
		昆

各漢字について、反切を記す順序を入れ替えると次のような配置を得ます。これを今後は「反切二徒配置」と呼ぶことにします。

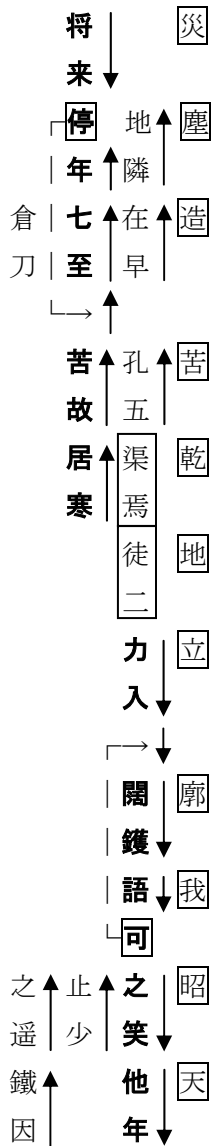


反切二徒配置

	将		災
	来		
	停	地	塵
	年	隣	
倉	七	在	造
刀	至	早	
	苦	孔	苦
	故	五	
	居	渠	乾
	寒	焉	
		徒	地
		二	
	力		立
	入		
	闊		廓
	鑊		
	語		我
	可		
之	止	之	昭
遥	少	笑	
鐵		他	天
因		年	
		枯	坤
		昆	

反切への導入役だった「坤」の反切「枯昆」はもう除いて考えましょう。「乾」の反切「渠焉」については、「渠」も「焉」も、共に「いづくんぞ」という語。つまり「渠焉」＝「なぜ？なぜ？」と解します。「地」の反切「徒二」については、「徒二」→「二徒」＝「二つの仲間」と捉えて、これを2文字ずつ追うという指示とみなします。「徒二」を「二徒」と読む下から上への向きに倣って、「廓我昭天」→「天昭我廓」とし、さらに「天昭我廓」の順に反切を追うと「他年之笑語可闊鑊力入」＝「他年の笑い。語はなべを欠き得る。努めて入れよ。」を得ます。「闊鑊」＝「なべを欠く」は、De Smedo の「吾」を「五」で表してい

たことに符合します。「吾」の「口」を蓋付きのなべと見なしているわけです。「力入」＝「努めて入れよ」というのは、他の箇所のようにニンベンや手ヘンを他の文字から借りてくるのとは違い、借りることなしに「口」を自分で付け加えよ、という意味のほうです。そして冒頭の「他年之笑」＝「他年の笑い。」は、そのような「五」→「吾」が、現在のE群ではなく、その前のD群において生じていたことを思い出させます。しかし「他年之笑語可闊鑊力入」＝「他年の笑い。語はなべを欠き得る。努めて入れよ。」とするよりは、「**他年之笑語闊鑊可力入**」＝「**他年の笑い。語はなべを欠く。努めて入れるべきだ。**」とする方が適切です。このように訂正するためには「可」を移動させる必要があります。この移動については後述することとして、さらに下から上に向かうと、下から上に追う「二徒」＝「二の仲間」と「渠焉」＝「なぜ?なぜ?」を超えてからの配置では、文字を追う順序が変化していることに気がきます。ここからは反切を単に下から上に追っていくことでほとんど読めてしまいます。まず「五孔早在隣地」については先の「闊鑊」を意識すれば「五孔」→「五+あな」→「五口」→「吾」はすぐに解ります。つまり「**五孔早在隣地**」→「**吾早在隣地**」＝「**私は早期には隣の地にいた**」です。先の「他年之笑語闊鑊可力入」と同様、この「五孔」は De Semedo の一人称のほうです。するとこの「隣地」は、De Semedo が明国に入国してから3年後に追放された先のマカオ（漢名では「澳門」）に相違ない。「五孔早在隣地」の先は改行して、「**少止**」＝「**しばらくしてやめた**」です。そして空白をはさんでさらに「**寒居故苦**」＝「**貧しくわびしい住居だったため、苦しんだ**」です（「寒居」は必ずしも「寒い住居」とは限りません。「貧しくわびしい住居」という意味もあります）。続いて「至七年停来将」です。「至七年」は「七年になる」ですが、最後の3文字の順はどうみてもデタラメです。「停」は「停至七年」＝「留まること七年になる」となるはずです。さらに「来将」は「将来」として、「**至七年停来将**」→「**停至七年将来**」＝「**留まること7年になって、そして来た**」となるのが自然です。実はこの「停」の移動は、前述の「可」の移動と、次図のような対象をなすことで符合するのです。



こうして得られる「吾早在隣地。少止。寒居故苦、停至七年、将来。」には、「来将」→「将来」という問題以外にも、2つ納得のいかない点が残っています。まず1つは「少止。」です。「しばらくしてやめた」のに「留まるどころ7年に至って」というのはおかしい。ならば「少止。」は De Semedo が明国に初めて入国してから追放されるまでの3年間を指している語のはずです。つまり句の順としては「少止。吾早在隣地。寒居故苦、停至七年、将来。」のはずです。こう記してみると「少止。」については、「他年之笑語闊鑊可力入」＝「他年の笑い。語はなべを欠く。努めて入れるべきだ。」によって得られる「吾」の1文字が先について「吾少止。」となるべきであることに気がきます。つまり「渠焉」と「二徒」によって、配置全体が上下に二分されているのです。「二徒」より下の箇所では、「吾少

止。」を得るのですが、それは「他年之笑。語闊鑊。可力入。」→「吾」と「少止」を併せたものです。この最後の「少止」は「他年之笑。語闊鑊。可力入。」に対して向きが逆です。このことは「渠焉」より上の箇所である「吾早在隣地。寒居故苦、停至七年、将来。」において最後の「将来」が逆向きに配置されたことに符合します。これで「来将」→「将来」の問題も解決しました。

納得のいかないもう1つの点は、「停至七年、将来。」です。これでは明国を追放されてから再入国まで7年間マカオに留まっていたことになってしまいます。実際は、1617年追放で1620年再入国ですので、3年間もしくは4年間です。「至七年」の「七年」という期間については、事実と符合するのは、De Semedoの明国への再入国が初入国から7年後のことだ、という事くらいです。それを含めて考えると、「吾少止。吾早在隣地。寒居故苦、停至七年、将来。」＝「私はしばらくしてやめた。私は早期には隣の地にいた。貧しくわびしい住居だったため苦しみ、留まること7年になって、そして来た。」では、まるで、1613年の初入国後すぐに追放されて7年間ずっとマカオに留まってから、再入国したことになってしまいます。まさに「渠焉」＝「なぜ？なぜ？」という内容の記述です。実はこの答はマカオつまり「澳門」に隠れているのです。「澳」は乙六切と於到切です。

於↑ 乙↑ 澳  
到↑ 六↑ ⇒ 「六乙到於」

「六乙」については「乙」は十干の2番目です。このことから「六乙」→「六の2番目」→「六の次」→「七」と解せます。「到於」については、「到於」→「到於澳門」→「マカオより至る」のはずです。つまり「六乙到於」→「七、到於澳門」→「七（年が過ぎて）マカオより至る」です。これは正に今問題としている内容です。一方「門」は謨奔切。「奔」は「急ぎ赴く」こと。つまり「謨奔」→「莫言奔」＝「「急いで（マカオに）赴く」と言うな」です。つまりこれは「吾少止。吾早在隣地。寒居故苦、停至七年、将来。」に対して、「明国への初入国早々にマカオに赴いてどうする、事実と違うだろう！」と責めるな」というパロディだったのです。人騒がせなトリックでしたが、この箇所は景教流行碑の碑文が1620年以降に作られたものであることを示しています。

振り返ると「二徒」＝「二つの仲間」には、上下2つのエリアに分けて読ませる、という意味も込められていたことに気がきます。ここでは Semedo が「吾」だったのですが、「吾」を形成する「五」→「吾」の操作の裏づけとなった反切「力入」について、さらに「力」と「入」のそれぞれの反切を採ると、「力」は六直切、「入」は日執切です。反切を左からの横書きにすると

力 六↓直↓  
人 日↓執↓

つまり「直執六日」です。「執」は「とらえる」、「直」は「ただちに」です。つまり「直執六日」＝「直ちに「六日」を捕らえよ」です。目下の大月改定配置は漢字1字を1日とみなすカレンダー配置に基づいているので、「六日」＝「「六」の字」ということになります。つまり「直執六日」は、前出の「六合」と「玄宗」の除去に対する符合なのです。つまり「直執六日」→「直執「六」字」→「直執玄宗」＝「直ちに玄宗を捕らえよ」です。なぜ明代の帝ではなく唐代の玄宗なのか？これは唐代の石碑と称してその実は暗号で明代の事件が記されている、ということに対抗させたパロディーになっているのです。De Semedo を表す「吾」は、本来ならば明代の万暦帝に向けるべき怒りを、暗号の世界において唐代の皇帝にぶつけているのです。「六合」と「玄宗」の除去によって再認識される「玄宗が六代目であること」の強調は、前出の「權王」という表現と符合します。「玄宗」が六代目であるというのは、「女性である則天武后を皇帝と見なさない」ということを意味します。このことと女性である Elizabeth I 世を「權王」と表したことが符合するのです。

では次に「吾少止。吾早在隣地。寒居故苦、至七年停、将来」の残骸である「鐵因」「之遙」「倉刀」を解説しましょう。以前の解説順に従って「五」→「吾」に対する符合のエリア（つまり「徒二」の下のエリア）に属する「鐵因」と「之遙」からとりかかりましょう。「遙」はシンニョウを含んでいます。シンニョウは「之繞」。「繞」は「まわりつく」と

いう意味。つまり「之」によく似た形の「𠄎」が「𠄎」にまわりついているのです。

「繞」の集韻反切は「爾紹」と「人要」。「爾」は「汝（なんじ）」、「紹」は「つぐ、うける、ひきあわせる」こと、そして「要人」は「要路にある人、顕要な地位にある人」。つまりは「重要人物」です。つまり「爾紹人要」→「爾紹要人」＝「おまえは重要人物にひきあわせる」。一体誰にひきあわせるというのでしょうか。ところで「𠄎」は確かに「之

繞」なのですが「𠄎」と「之」は似ているのは外見だけで、「𠄎」＝「之」ではなく、

「𠄎」＝「𠄎」です。「𠄎」、「𠄎」、「𠄎」はいずれも「𠄎」の略字です。ところが「𠄎」の集韻反切は「敕略」。「敕」はいましめる。これにより「敕略」→「略（字）

をいましめる。」→「𠄎を除く」と解します。つまり「遙」→「𠄎」です。「𠄎」は

「瓦器を焼くかまど、かめ」であり、集韻反切は「夷周」と「餘招」です。「瓦器を焼くかまど」は以前の「陶淵」の作り方と符合し、「かめ」は「闊鑊」の「鑊」同様、「五」→「吾」に対する符合になり得ます。「夷周」→「周夷」＝「周囲のエビス」も、「掃四溟」の「四溟」そのものです。そして「餘招」については、「責子」の

「白告糸交」←「皓絞」

←←←←

と同様に考えれば、

「食余手召」←「餘招」

←←←←

つまり「**召手余食**」＝「**手ヘンをまねき寄せ、食ヘンを余す**」となり、これは以前の「饌+披」→「「撰+皮」余り「食」」と符合します。ここで「沸物化撥無定色起亂」→「沸物化發無定色起亂」において、手ヘンが余っていたことを思い出しましょう。これらのことは

「**𦏧**」→「揺」という操作を促します。「揺」は「ゆらす、ゆれる」で集韻反切は「餘招」と「弋笑」です。「餘招」は既出。「弋笑」の「笑」は、「竹吏之笑」を思い出させます。あの「笑」は、「玉龍」＝「劍」が逆に「龍玉」となっていたことを笑ったわけですが、一方「弋笑」の「弋」は「杙（くい）」のこと。「竹吏之笑」の「劍」は「杙（くい）」と言ったほうがより正確（あまりこのようなことを書きたくはないのですが）です。「弋」→「杙（くい）」は手ヘンではなく「木ヘンを加える操作」です。するともう一組の反切「倉刀」については、この「木ヘンを加える操作」によって「倉」→「槍」となり、この「槍」と「刀」が符合することに気がきます。つまり

「之遙」→「揺」

「倉刀」→「槍」

です。反切二徒配置において、「鐵因」「之遙」を下から追うと、「因鐵、遙之」＝「鉄に因む。これを遙かとする。」＝「鉄に縁があるもの。そのものから遠くにいる。」です。つまり「鐵因」と「之遙」の2つは、遠く離れた「倉刀」→「槍」への言及でもあるわけです。こうして得られる「揺槍」は **Shake Spear** つまり **Shakespeare** を連想させます。

「倉」は千剛切と楚亮切、「槍」は千羊切、楚耕切、此両切。「此両」＝「この二つ」で

す。「此両」は「槍」の反切のうち解読に使用すべきものが「千羊」と「楚耕」であるとも、「倉」と「槍」の両方が解読に用いられるのだとも解せます。

「倉」と「槍」の集韻反切のうち「此両」以外を左から横書きにすると、

倉 千↓剛↓ 楚↓亮↓

槍 千↓羊↓ 楚↓耕↓

です。「剛」は「断ち切る」。矢印の通り縦に追えば「剛羊千千」＝「羊を細かく断ち切る」であり、この「断ち切る」というのはまさに **Shake Bacon** の **Shake** です。「亮耕楚楚」＝「亮（あきらか）、耕（たがやす）、楚（むちうつ）、楚（むちうつ）」は「家畜」を連想させます。この「家畜」という語は「剛羊」と **Shake Bacon** の家畜（つまりブタ）の差異に気付かせます。**Bacon** はブタであるのに、「剛羊」はおかしい。ここで「羊」のかわりにブタを考えましょう。ただし「剛羊」の「羊」は「羊肉」とまでは記されてはいませんので、「羊」のかわりとするブタとしては、ニクヅキのある「豚」ではなく「豕」を考えることにしましょう。すると「豕」の集韻反切は「賞是」と「下改」です。「賞」は「賜う（たまう）」。つまり「下改賞是」→「改下賞是」＝「下を改め、これを賜う」です。「下を改め、これを賜う」というのは

千↓剛↓

千↓羊↓

の配置の下部の「羊」を「豕」にするということ。つまり

千↓剛↓

千↓豕↓

であり「剛豕千千」＝「豕を細かく断ち切る」。これはまさに **Shake Bacon** です。「吾少止。吾早在隣地。寒居故苦、至七年停、将来。」の残骸である「鐵因」「之遙」「倉刀」が **Shakespeare** を意味していたということは、つまりは**李之藻に Francis Bacon=William Shakespeare の符合を伝授したのが他ならぬ De Semedo である**ということ伝えてあります。

先ほどの「**𪛗**」→「揺」という操作では、「召手余食」のうちの「召手」のみが実行され、「余食」については符合を得てはませんでした。「剛豕千千」まで到達した今、振り返ってみても食ヘンの登場は無い。「余食」は果たしてどこにあるのでしょうか。もうお気づ

きでしょうか、「余食」つまり「余るほどの食」は「剛豕千千」そのものです！

光啓取宋克明！

金啓取宋克明！

願刻洪碑以揚休烈詞曰真主無元湛寂常然權輿匠化起地立天	<b>分身</b>	<b>出</b> ↑ 代救
	→→	
度無邊日昇暗滅咸證真玄赫赫文皇道冠前王乘時撥亂乾廓坤	<b>張明</b>	<b>明</b> ↑ 景教
	→→	
和宮敞朗遍滿中土真道宣明式封法主人有樂康物無災苦玄宗	<b>啓聖</b>	<b>克</b> ↑ 修真
	→→	
威引駕聖日舒晶祥風掃夜祚歸皇室祇氛永謝止沸定塵造我區	<b>夏代</b>	<b>宗</b> ↑ 孝義
	→→	
統極聿修明德武肅四溟文清萬域燭臨人隱鏡觀物色六合昭蘇	<b>百蠻</b>	<b>取</b> ↑ 則道
	→→	

2文字ごとに下から追って、「百蠻夏代啓聖張明分身」を得ます。「蠻」は「南蛮」つまり西洋のことと解せます。「百蠻」は「数多の西洋の国々」ということ。「夏代」とはこの場合「夏の時代」ではなく、「古代」と解するのが自然。「百蠻夏代啓聖」は「数多の西洋の国々の人にとっての古代の啓発の聖人」つまりは「キリスト」です。

「張」は「ほどこす」。「百蠻夏代啓聖張明分身」＝「キリストは明かりをほどこし、身を分け」では意味不通です。解読のポイントは「張明」です。「張明」＝「明かりをほどこす」→「光」と考えましょう。すると

分身  
 張明  
 啓聖  
 夏代  
 百蠻  
 ↓  
 分身  
 光  
 啓聖  
 夏代



## 百蠻

この置き換えによって、「徐光啓」の名「光啓」を得ます。これを手掛かりに

分身

張明

啓聖

夏代

百蠻

↓

分身

→→

光

↓

啓聖

↑

夏代

→→

百蠻

→→

↓

百蠻夏代聖分身光啓

↓

キリストの分身の光啓

を得ます。徐光啓がキリストの分身というのはずいぶん乱暴な褒め方です。続く「取宗克明」もしくは「明克宗取」の解読は「百蠻夏代聖分身」と「光啓」を分けて考えることで解決します。「百蠻夏代聖」はキリストに相違ないでしょう。「分身」とは「ある一つのものからわかれでたもの」です。キリストと「分身」というと、「責子」の JCH と GOD の 2 つの L 字型を思い出します。JCH の L 字型は十字架の片割れ、つまり十字架の**分身としてのキリスト**でした。一方、続く箇所は「宗」→「宋」として「取宗克明」→「取宋克明」とするならば、これは徐光啓と関連します。徐光啓が「取宋克明」＝「宋を取り、明に勝つ」というのはどんな意味か。実はこれは数学のことを指しているのです。南宋の時代の秦九韶（しんきゅうしょう [おおよそ 1202-1261]）の著作『数書九章』は 12 世紀初頭とは信じ難

いほど高度な内容です。大衍求一術（現代の日本の大学の数学科3年で学習する『中国の剰余定理』）や、天元術（高次方程式の解法）の二つを挙げるだけでも、当時のヨーロッパの数学より何世紀も先んじていたことは一目瞭然です。そのような多くの研究が、あろうことか明代になるとどんどん廃れていき、テキストも失伝の危機にさらされたのです。この嘆かわしい事態の原因は何か、そして数学は今後どうあるべきか、等といったことを徐光啓が著した書物も残っています。つまり徐光啓にとっての「取宋克明」は「優れた宋の数学を摂取して、明代の閉塞状態を克服する」ということです。

つまり「**光啓取宗克明**」→「**光啓取宋克明**」＝「**徐光啓は、優れた宋の数学を摂取して、明代の閉塞状態を克服する**」ということ。ここで用いられた「宗」→「宋」については、「宋」は蘇綜切です。

蘇綜→蘇糸+宗

と解釈します。すると「蘇糸」については、「百蠻夏代聖」と「分身」から思い出されたJCHとGODの2つのL字型を含む責子の配置には、上下左右対称のつながりを表す「交糸」があったわけであり、我々は「百蠻夏代聖」と「分身」とから連想によって、記憶に「交糸」を蘇らせるわけです。つまり

「百蠻夏代聖」+「分身」+「宗」→「蘇糸」+「宗」→「蘇綜」→「宋」

すなわち

「百蠻夏代聖分身光啓取**宗**克明」

→「百蠻夏代聖」+「分身」+「光啓取**宗**克明」

→「光啓取**宋**克明」

という符合を得るのです。「取宗克明」に続く「出」は暗号エリアから出る、つまりは解読の終了ポイントを示しています。

ここでさらに「金光大同」を思い出しましょう。つまり「張明」→「光」→「金」と考えると、「光啓取宋克明」には、「**金啓取宋克明**」＝「**金国は宋を開放し、取り、明との戦いに勝つ**」という意味も隠れていたことに気がきます。どうみても「光啓取宋克明」は李之藻の心境であり、「金啓取宋克明」は De Semedo の心境です。つまりこの最後の箇所では、李之藻と De Semedo が同時に別の意味合いの言葉を叫んでいるのです。

## 郎佐牛加盧

ここで、『封印を継承する者たち（1）』で保留されていた Jacques Rho の漢名「羅雅谷」から得られる反切の列「郎佐牛加盧谷」を解説しておきましょう。「盧谷」の「谷」については「盧谷」自体が「谷」の反切として得られており重複していることから、除いて考え「郎佐牛加盧」の5文字の反切を採りましょう。

盧↑郎 羅  
當↑  
↑子 子↑佐  
↑我 賀↑  
↓魚↑牛 雅  
↓尤  
↓居 加  
↓牙  
↑凌 ↓龍 盧 谷  
↑如 ↓都  
谷

「魚賀子當盧」→「吾賀子當盧」＝「吾、子を担う、盧の類」

「盧」は「飯を盛る器」です。「當盧」＝「盧の類」を「口」と見なし、「吾＝五口」と見なせば、これは前出の「五」→「吾」と符合します。「吾、子を担う、盧の類」は、

**「吾賀子當盧」の「子」＝「吾」の上部の「五」**

なのだ、と言っていることになります。

**「吾尤居牙龍都」→「吾尤牙居龍都」→「吾尤牙之居龍都」  
＝「吾は王都に兵器がのさばることを咎める」**

これはD群の「精爪郭方」と符合します。

**「如凌我子」＝「私の「子」を凌ぐかのような」**

「如凌」という表現から考えて、「如凌我子」は「自分（李之藻）の暗号の腕前が Francis Bacon の『薔薇の封印』の暗号を凌ぐほど見事だ」という自慢です。つまり「我子」は Francis Bacon です。しかし同じ「子」でも、先の「吾、子を担う、盧の類」の「子」については、それが誰を連想させるかといえば De Semedo です。「吾は王の都に牙を蓄えることを咎める」はもう一人の「子」、つまり「子作備諸軍」の「子」を思い出させます。「作備諸軍」は De Semedo の耳目の1つです。つまり De Semedo が「作備諸軍」を体験したわけではありません。つまり「子作備諸軍」は De Semedo とは明らかに別人です。つまり「郎佐牛加盧」の各文字の反切の解説結果は3人の「子」がいるのだと主張しているわけです。

一方で「子」は祖似切と将吏切です。「将吏」は成句で武官と文官のこと。「祖似将吏」＝「祖は武官と文官に似る」です。この「祖」とは「法皇」の「皇」の「初代の皇帝」という語義によって Francis Bacon のことだとわかります。武官は「子作備諸軍」の「子」に該当する宣教師を充てるのが自然。すると文官は De Semedo と解せます。つまり3つの「子」が別人だということは、「子」の反切と符合するのです。

## 碑文作製時期について

大月改定配置の月末の解説で「御帝風」を訂正する際に、うるう日の「虚」を意識的に使用させることで、うるう年に注目させています。そして「急いで赴くと言うなかれ」の箇所、De Semedo がマカオから戻ってきた 1620 年以降に作られたことを知らせています。同じ箇所、D群の「五」→「吾」を指して「他年之笑」としていたこと、つまりD群を「他年」としていたことは、カレンダー配置の5年（正しくは4年と8ヶ月弱）に対して、大月改定配置も5つの群を成しており、それらの各群も同様に1年として数えられるべきことを教えています。カレンダー配置では4年目をうるう年としたのですから、大月改定配置ではD群がうるう年に該当することになります。D群の最後の De Semedo の「吾旬耳目總」というのは、国外から戻ってきて間もない人が、見聞きしたことをくどくど説明しているような口ぶりです。そして実際に De Semedo が明国に再入国した年である 1620 年はうるう年です。

これらの符合から、「D群＝1620年」とすべきことに気が付きます。そして大月改定配置の30日の列の解説において、D群に該当するのは、「伊僧者来家献俾之」です。つまり 1620 年に李之藻が De Semedo から依頼され、それを承諾。そして翌年の 1621 年＝E群において「則孝修景代」、つまり碑文作製が完了したということになります。

## 後書き

イエズス会宣教師 **De Semedo** にとって、日本の同会の宣教師が弾圧に屈し軍備に加担しているという情報は、とても気まずいものはずですが、彼はそれを告白してしまいます。李之藻は、露骨に儒教と祖先の偶像崇拝を掲げ、**De Semedo** の至らなさをなじっています。民間でも官僚の世界でも少数派のキリスト教徒だった李之藻にとって、宣教師に見放されるような振る舞いをするのは、自分の立場を危険にさらす行為のはずです。碑文中では双方ともただひたすらに本音を言い合っているのです。暗号の世界では肩書きや立場による一切の束縛から自由になっている彼らですが、法皇つまり **Francis Bacon** もまた、『薔薇の封印』の暗号の中では肩書きや立場による一切の束縛から自由になっていました。李之藻が最も崇拝しているものは **Francis Bacon** が自分の暗号（それは **De Semedo** から李之藻へと伝授された）によって後世に伝えようとした「実証の姿勢に基づく考え方」です。その技術の意味するところを李之藻は「真證道真風」という語で見事に表現しています。

**Renaissance** に始まった新たな（確かに **Renaissance** は復興ですが、当時のヨーロッパにとっては実質的に新たなものだったはずです）経験である**科学**は、それが人々にもたらす『天啓』において、宗教をはるかに凌ぐものでした。

宗教的天啓よりも具体的・衝撃的・永続的な科学・技術工学における諸発見。研究者にとっては、発見に際しての衝撃において（徐々に体系的に認知し獲得しつつある科学法則の大系の整合性を直感する際の驚嘆）、一般の人々にとってはその発明の成果の明確な力と威力において、新興富裕層にとっては、それがもたらすであろう測り知れない富において、科学・技術工学は宗教にとってかわる『天啓』となる可能性に満ち溢れていました。異端審問や魔女狩りがまかり通るような低レベルの精神文化が、覚醒無しに科学・技術工学の威力だけを手にしたならばどうになってしまうのかは、ヨーロッパを客観視できる立場にある李之藻によって「災塵造苦乾地」として記されています。当時の（真の意味での）知識人たちが科学の諸発見と共に求めたものは、科学・技術工学の威力に見合うだけの精神文化の向上だったのです。その向上は「真證道真風」によってしかもたらされない事を彼らは承知していたのです。

しかし新しい天啓である科学の発見さえ、自然が人間に与えるものであるはずのものを、「自然→神」というすり替えによって、あくまで神が人間に与えるものと見なして宗教にしがみつような考えが残ったわけです。というよりも、新しい天啓に浴することで本心では神など忘れていた知識人が、宗教を振りかざす権力者に対して自分たちの業績を認めさせねばならないときに、そのような台詞が選ばれたわけです。

これに対して**天啓とも感じられるような知的衝撃ですら、人間の手にによって（しかも簡単な原理で）造りうるのだということ**を、実証してみせたのが『薔薇の封印』に見られる

**Francis Bacon の暗号だった**のです。この意味で、『**薔薇の封印**』は **Renaissance に始まった意識改革の1つのピーク**と言えます。そのような精神修養の糧がイエズス会士 De Smedo によって明代の数学者に継承されたわけで、景教流行碑の碑文は、正に継承がなされるシーンを描いたものと言えます。

この継承はいかにも **Rosicrucian** の後継者づくりのように見えます。そして、『薔薇の封印』の暗号を解読すること自体、それが要求する情報収集能力と見た目に騙されない推理力は当時の人々にとってはたいそう高度な試練だったに違いなく、それ故『薔薇の封印』の暗号の中身を知ることがすなわち **Rosicrucian** たる証だったのではないか、という予想が成り立ちます。『薔薇十字の覚醒 F イェイツ著 山下知夫訳 1986 工作社』には薔薇十字団とイエズス会とが激しく対立していたにもかかわらず、いかに類似したものだったかが記されています。『薔薇の封印』の暗号を知っていたイエズス会士 **De Smedo** が **Rosicrucian** だった可能性は高い。しかし大切なのは「薔薇十字団」という名前自体ではなく、**Francis Bacon** による新しい精神の教化が **De Smedo** を通して確かに李之藻に届けられた、ということです（ただし届けられる前から李之藻がそのような意識を有していた可能性はあります）。最新の科学技術による殺人兵器が大国によって使われ続け、核兵器が世界の平和を維持するのだという考えが相変わらずはびこり続ける現代にとっても、「真證道真風」は決して無縁なことではないでしょう。

中国のキリスト教会では徐光啓、李之藻、楊廷筠（ようていいん）の3人は『教會三大柱石』と呼ばれています。『柱石』つまり中国のキリスト教の礎石となった人物ということでしょう。李之藻は極めて多才な人物だったようで、布教・数学・天文学・詩作の他にも大きな業績があります。『坤輿万国全図（こんよばんこくぜんず）』は、マテオ・リッチの指導のもとに李之藻の補佐によって完成した世界地図です。江戸時代、御禁制だったこの地図は、密かに日本にも持ち込まれています。また李之藻には『頓宮禮樂疏（はんきゅうれいがくそ）』という著作もあります。「頓宮」は「周の諸侯が都にたてた学校」、「禮樂」は「礼儀と音楽」、「疏」は「むずかしい文句を、ときわけて、意味をとおした解説」。つまり『頓宮禮樂疏』は孔子の時代の礼儀と音楽の解説書です。この書は今日でも古代の禮樂を研究する上で貴重な資料となっています。

李之藻は 1621 年の碑文完成から 7 年後の 1628 年に責子を創作し、翌年 1629 年には徐光啓に抜擢されて暦局の副局長に就任しますが、1630 年には他界してしまいます。徐光啓も 1633 年にその後を追うように死去します。一方 **De Smedo** は「封印を継承する者たち（1）」中の引用文にある通り、**1642** 年ローマ入りし、**1644** 年に中国に戻り、中国副管区長に就任しますが、安易に清朝に迎合することを避けるかのように、明朝の皇族との関わりを持ち続け、其の挙句に清軍に殺されそうにもなります。中国に戻った **De Smedo** の胸中には、当時は既に他界していた李之藻に対する懺悔の気持ち、いやそれ以上に誇り高い李之

藻の生き方に対する熱く深い想いが、あったのではないのでしょうか。

参考文献について：

(1) (2) を通して、執筆に際して使用した漢和辞典は『藤堂明保編 学研漢和大字典 1978 学習研究社』と『諸橋轍次著 大漢和辞典 1971 大修館書店』の2つです。その他の参考文献は文中にその都度掲げました。